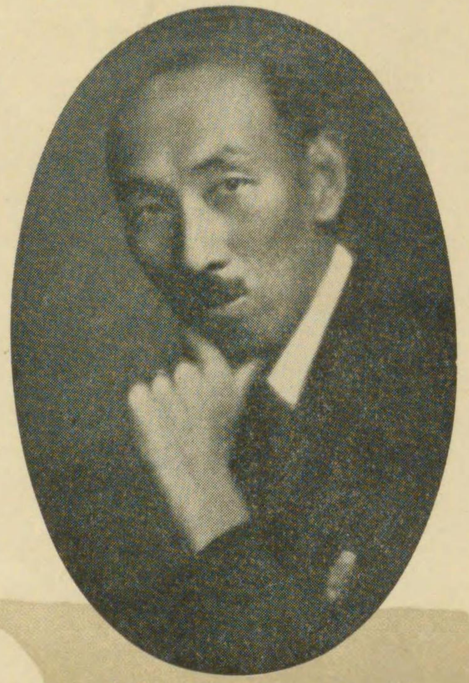
新潮社
長篇文庫

517-669
1200700382787

博士郎の怪事件

浜尾四郎

濱尾四郎著



博士邸の怪事件

目次

博士邸の怪事件……一
不幸な人達……二六五
救助の權利……二九五

517
669

I種
W

1200700382787

博士邸の怪事件

濱尾四郎

——吉邨二郎氏裝畫——

一

數年以來の嚴しい寒さもやつと去つて、世は漸く春に向はうといふ三月十日の夜、東京中央放送局は近來にない緊張振りを以てつゝまれて居た。

或る意味に於ける我が歴史學の權威簑川文學博士が、最近學界にすさまじい波瀾を捲き起したその得意の新説を、今夜七時二十五分から三十五分間、通俗講演として放送する豫定になつて居るのである。

博士が最近學界に投じた一論文『我戰國時代と外國の宗教』は從來の通説を裏切る事甚だしいもので、賛成するもの反對するものいづれもおびたゞしく、殊に論爭の中心となつた所は、『織田信長とポルトガルの宣教師との關係』といふ點であつた。

その『織田信長とポルトガルの宣教師の關係に就いて』といふ題目を引つさげて博士は自己の新説を今夜通俗講演として放送する事になつてゐるのだ。苟くも我國の歴史に趣味を持つラヂオファンは、この時間を全國に於いて、今か今かと待つてゐる筈である。その放送の發送地

たる中央放送局の人達が緊張し切つてゐるのも無理はない。局には局員ばかりでない。新聞社の人達も、姿を現はしてゐる。

博士の新聞記者嫌ひは有名なものである。しかし博士が相手にせぬからと云つて新聞社の人達が默つてゐる筈はない。自宅へ行けば必ず擊退されると知つてゐる新聞記者達は、數名放送局に張り込んで、是が非でも博士を捕へて一言でも何か云はしてやらうと待ち構へてゐるのであつた。

時計は今六時五十分を指して居る。

マイクロフオンの前では澤木文學士が英語講座を終らうとして居る。

六時五十分、英語講座が終つた。

「七時からニュースに移ります」

といふアナウンサーの聲がはつきりと局内に響き渡つた時、さつき簑川博士を迎へに出て行つた放送局の自動車は博士を乘せて、靜かに放送局の玄關に姿を表はした。

運轉手が素早く降りて車の扉を開けるより先に、博士は自分でかるく戸を開けて、何時もの

通り苦蟲を嚙みつぶしたやうな顏をしながら車から降り立つた。

それとばかり數名の新聞記者が博士を取り圍んだが、博士は何時もの通り無愛想に之を見ながら、もう度々來て慣れ切つてゐるやうすを見せて、案内の局員と並びつゝまつ直ぐに應接室へと這入つて行つた。

「お忙しい所を何うもありがたうございました。」

「いや……たゞ何うも迎ひが何時もよりちと早過ぎたやうだ。大分まだ時間がありますな。」

「若し遲れてはと思ひましたので少々早目に出して申譯ございません。」

こんな會話が取交されてゐる所へ、今英語講座を終つた澤木學士が室に這入つて來たので局員はそれをしほに室外に出て行つた。

「おや、簑川先生ですか。失禮しました。今日の御講演は私も此處で是非拜聽させて頂きたいと思つて居ります。」

「澤木さん、貴方も大分御精が出ますね。毎日では隨分御苦勞樣ですね。」

簑川博士は今まで數回放送局に來た事もあり、專門は違ふが同じ文學科の者なので二人は前

から可なり親しい間柄でもあつた。

といつても深く人と交際しない博士の事だからさう大して胸襟を開いて語り合ふといふ程の間では勿論なかつた。

給仕がお茶を運んで又扉を締めて去つた。

「何しろ今日の先生の放送は、例の騒ぎを捲き起した位の大問題なのですから、とても聞き逃しは出來ませんよ。……殊にその中でも、御得意の題目に就いてやられるのですから大變な人氣ですよ。可哀想に後の演藝放送なんかの人氣もすつかり先生の講演にさらはれた形です。」

斯うした一種の世辭が、全く俗界をはなれたやうに見える簑川博士にとつてはまんざらでもないと見え、この時始めて博士の顔に會心の笑が浮んだ。

「いや何うも恐縮ですな。然しうるさいですよ、後が又もめるでせう。大體あれは、『史學研究』といふ專門雜誌に論文として書いたのですが、新聞紙が社會欄で取扱つてしまつたので、大した騒ぎになつちまつたんです。今日の放送だつて私にこの放送をさせるさせないで大分問題になつてゐると聞きましたよ。濟んでから後で又隨分投書なんかゞ來てうるさいでせう。」

「併し、あゝいふ專門的な事を通俗に御說きになるのは、隨分むづかしい事でせうな。」

「さあ、其處ですよ、眞實に苦心の要るのは。」

博士は何時になく雄辯になつて學士に答へようと傍らに置かれた茶をぐつと一口に飲んだ。

その時だつた。

扉をノックする音がすると、給仕が慌たゞしく戸を開けたが、簑川博士の方に向つて、

「先生、御電話でございます。」

と呼びかけたのである。

「何、電話？」

博士はうるさゝうに、腰をあげようともせずに云つた。

「今忙しいんだが急用でなかつたら後にしてくれと云つて下さい。」

給仕はかしこまつて戸を締めて行つた。

「私の講演が八時には濟む事が判つてゐながら今頃電話を掛ける奴もないもんだ。」

獨言のやうに云ひながら懷中時計を出して眺めてゐたが時計は丁度七時八分を過ぎてゐる。

ノックに次いで、又給仕が戸口に表れた。

「さう申したんですが、是非先生に出て頂きたいとおつしやいますんで……お宅からでございます。奥さんが出て居られるやうで……」

給仕はかう云ふと一寸ずるさうな顔をして博士を見た。

「家から？……何だ、今頃。そんならさうと早く云つて下さればいゝのに。……澤木さん一寸失禮します。」

博士は斯う云ふとあわてたやうな樣子で室外に出て行つた。

後には澤木學士が應接室に一人殘された。エーアシップをくゆらしながら、じつとアナウンサーの聲を聽いてゐる。今某新聞のニュースが聞える。

「次は府下吾嬬町の一家心中の御話。おかみさんが熟睡中の夫を始め子供を殺して自殺をはかつた事件が起りました。府下吾嬬町請地谷口一郎の妻信（二十三）は豫てヒステリーで時々あらぬ事を口走つて居りました所……」

澤木學士は此處までニュースを聽いて來た時思はずニヤリと笑みを洩らした。さうしてさつ

き給仕が博士に

「お宅からでございます。奥樣が出てお出でのやうです。」

と云つた時、妙なずるさうな表情をした事を思ひ出した。

「さうか、成程、あの博士夫人のヒステリーはこんな所の人達にまで有名になつてゐるものと見える。博士も中々變つてゐるが、あの夫人では博士もこれから大分惱まされる事だらう。」

斯う考へてゐる所へ博士が憂鬱な顔をして戻つて來た。

普通の場合ならば、社交のうまい學士の事だから

「何かお宅に急な御用でも起りましたか」位の事を訊く事は十分心得てゐるのだけれ共何分相手の夫人のヒステリーといふのが、博士の奇人である事位有名になつてゐるので學士はわざと電話の事には觸れまいと決心して、何か自然な題目はないかと心の中でいろ〳〵と考へてゐた。

果して簑川博士は、電話の題目に觸れられるのを恐れるやうに強ひて早く他の話題を攫まうとするらしかつた。

「何うも失禮しました。何詰まらぬ事でしたので。」

「それは結構でした。先刻御話しゝてゐたのは難かしい專門の御話を通俗に話す事の御苦心のやうに覺えますが。」

「さう〳〵、それでしたね。」

博士は救はれたやうにその題目にかじりつかうとした。

「詰まり何ですな、相手に全然その知識がないのですから、それが面倒になるのです。丁度御專門の英語でも、初心者に話す方が、中學生に話すより難かしいのと同じ事でせう。」

學士は寧ろ氣の毒に感じた。簑川博士ともあらうものが妻の我儘を隱す爲めに、斯うも苦心——それも極めて下手な苦心をしてゐるか、と考へたのでそのまゝ默つて博士に喋べらせる事に決め、自分はたゞ盛んにエーアシップの煙を室に漂はした。

博士は、初めは話題を無理に作つて喋べり出したやうだつたが、途中で相手が巧みに相槌を打つてくれるのにおだてられたか、しまひには可なり得意になつて放送の苦心談をシヤベリ始めてゐたのであつた。

七時十五分頃になつた。

扉が又開いて局員が這入つて來た。

「先生、ではまだ少々早いやうでございますが、御案内を致しませうか。」

博士は、もう一度時計を出して見ながら、

「ではそろ〳〵行きますかね。」

と傍に置いた鞄の中から原稿紙らしい紙束を出さうとしてゐた途端、又先刻の給仕が戸口に現れた。

「簑川先生、御宅から又御電話でございます。奥樣が、電話口に出てゐらつしやいます。」

今度の傳達は甚だ嚴然としてゐた。

博士は遺に驚いたやうだつたが、何も云はずにそゝくさとして室から出て行つた。

「博士も大變だねえ君、此處へ來てから二度づゝも呼出されちや。」

學士が笑ひながら其處に立つてゐる局員に云つた。

さすがに局員も答へに困つたらしく笑顔を以て答へたが、手持ちぶさたさうに、懷中時計を出したり入れたりしてゐた。

七時二十分、博士は應接室へ戻つて來た。
「やどうも度々失禮しました。今行きます、判つてゐますから先へ行つて下さい。」
局員にかう云ふと、鞄の中から講演の草稿とおぼしき紙束を持ち出して、學士の方に一寸近付いた。局員は博士の云つた通り先に出て行つた。
「先生、何か起つたのですか。度々のお電話は？」
さすがに學士も斯う聞かざるを得なくなつた。
「實は、大阪にゐる妻の母親が死んだといふんですよ。それで妻はこれから直ぐ私にむかうへ行つてくれといふんです。――これは君だけに云ふんだが、どうも妻は我儘でね。私が行かなけりや自分が直ぐ行くつていふんで今怒つてやつたんですよ。何うも困ります。……では、これから一つやつて來ますから。」
輕く禮をして室外に去つた博士の姿は、譬へやうもなく惱ましく見えた。
「いくら昂奮してゐるとは云へ、そんなに親しくもない自分に、マダムの事を訴へるとは餘程先生も困つてゐると見えるわい。」

學士は獨言をいふと、お世辭でなく眞實に『織田信長とポルトガルの宣教師との關係について』をくつろいで聞く積りと見えパーラーの方へと出掛けて行つた。
蓑川博士は決して雄辯家ではなかつた。否寧ろ博士は訥辯家として知られてゐた。
然し、その夜の講演は期待してゐた通り、素晴らしいものだつた。放送局員もみな熱心に緊張して耳を傾けた。
ことに從來の學說を覆し、帝大教授連の說をまともに攻擊するあたりに至つて一同は思はず手に汗を握つた位であつた。帝大の講師をしてゐる澤木學士はこの邊で閉口して
「かう學校をやつゝけられちやかなはん。」
と云つて途中で歸つてしまつた位であつた。
午後八時一分前、巧みに博士は講演を完了した。
應接室に戻つた博士は、紅茶を啜りながら、
「何うもあゝいふ事になると思はず昂奮して喋べるので餘り出來がよくなかつたでせう。」
と相對座した局員に云ふのであつた。

「結構でした。皆大變喜んで居ります。」
かう局員のいふのを聞きながら
「あゝ君、給仕に云つて私の家へ電話を掛けさせてくれないか。」
局員は直ぐに其旨を給仕に命じ傳へた。
暫く博士は何ものか案じるやうにしてゐたが、堪りかねたか、
「一體電話は何うなつたんでせうね。」
と局員に訊ねた。丁度その時先刻の給仕が這入つて來て云つた。
「何度お呼びしても御宅でお出になりませんさうです。」
「何、出ない？……そんな譯はないんだが。……ではよろしい。失敬しました。直ぐ歸りませう。」
博士を乘せた放送局の自動車が勢ひよく愛宕山を下つて行つたのは八時を過ぎる事丁度十二三分であつた。
丁度それから約二十分經つた頃だつた。

麴町警察署の公衆電話がけたゝましく鳴り響いた。
急いで受話器を取つた一人の刑事は、電線を通じて慌て切つてゐる男の聲を聞いた。
「麴町警察署ですか？　私は麴町區富士見町の簑川文藏といふものです。私の家で人殺しが行はれました。妻が殺されて居ます。誰か直ぐ寄越して下さい。犯人は今全く判りません。」
刑事は事務的に簑川文藏といふ男の町名をはつきりと聞いてから司法主任の稻尾警部の所へ告げるべく直ぐに電話を切つたのである。

二

急報は直ぐに四方に飛んだ。
本廳からは腕きゝの相良警部以下數名が直ちに現場に驅けつける事になつた。
たゞ此の事件の報告が一番最後に屆いたのは地方裁判所檢事局の宿直室だつた。
此の夜、地方裁判所檢事局の宿直部屋には滯廣檢事が同じく宿直の古水豫審判事と將棋を戰はせて居たところだつた。

九時半頃、帶廣檢事は平手で三番立て續けにやられたので殘念でたまらず
「こんな日は何も起りさうもないからもう一丁行かう。」
と第四回目の勝負をしてゐた。
「今度こそやつゝけたぞ。」
帶廣檢事は心の中で呟いた。
自分の飛車をなり込まして之を切ると後六手でたしかに敵の王はつむ、と見たのだ。
「おい、さつさとやらないかい」と古水判事。
「待てよ、今こゝで……かうやる、あゝやると。何うも確からしいな、御手の中は？　……さうか、よし。」
檢事は敢然として飛車を成り込ませて敵の銀を奪ひ、次いで敵の金の餌食となるべき攻撃に出た。
「おい、確信があるかね、そんなことをして。」
「默つてろよ、まあ、斯うやつたら何うするんだ。」

この時、宿直部屋の電話のベルがチリ〳〵となり渡つた。續いて書記が受話器の前で話をしてゐるのが聞える。
「帶廣何か起つたやうだぜ。」
「なあに、又水死人だらう。それより君の方は何うなるんだね。」
「おい、だめ〳〵『被害者は？』なんてやつてるぜ、水死人ぢやないよ。」
「何。」
帶廣檢事は書記の電話を聞いてゐたが、つと立つて
「あゝいゝよ、僕が出る。」
「麴町警察からです。」
書記は斯う云つて受話器を檢事に渡した。
「あゝもし〳〵、僕帶廣ですよ、麴町警察？　楢尾君かい。あゝ、ふーむ、簑川博士つてのは今日放送した人かね、うん、奥さんが殺された？　犯人不明か。あゝ宜しい、直ぐ行きます。」
「とう〳〵起つたかい、今日もこれから夜明しかね。」

「殺人事件だ、絞殺らしいといふんだがね。……勝負も預けか。併しうまく犯人が捕まるかどうかためして行つてやらう。」

檢事も判事も別に慌てもせず再び盤面に向ふ所を見ればこんな場合、わざと心を落付けて心の餘裕を示してゐるのだらう。

併し勝負は、檢事の見込み違ひで、思はぬ拔け道があらはれて古水判事の王は巧みに危險を脫出してしまつた。

「いかん〳〵、又やられたか。此の分ぢや今夜の事件は迷宮入りだぜ。」

「帶廣名檢事の見込み違ひか、あはゝゝゝ。」

二人は盤を片付けると直ぐに衣服を改めて書記を促した。

夜の闇を突いて、檢事判事一行を乘せた自動車は、疾風の如く簑川博士邸へと向つたのである。

作者は此處で、事件に入るに先立ち、一應簑川博士の家庭の有樣を記して置かうと思ふ。

文學博士簑川文藏は今年四十五歲の男盛り、さきに一寸述べたやうに、或る意味では我が歷

史學研究の第一人者と云つていゝ人だが、この經歷は決して平凡なものではなかつた。

一言で言へば、博士は苦學立行の立志傳中の人だつた。若い頃から財力に惠まれなかつた爲、今は亡き某大學教授の家に書生となつて入り込み、漸く私立大學の夜學に通つた位の學歷しかなかつたにも拘らず、その孜々としての勉强振は遂に彼をして文學博士たらしめるに至つた。

たゞ斯うした苦學力行の士が得てして持つ所の一種の鬪爭精神が原因をなして、博士には幾多の敵があつた。學界にも社會にも澤山あつた。從つて博士はあれだけの學力にも拘らず、權威ある大學の教授となる事が出來ず、小さな私立の學校に講師として教鞭を振ふ事しか爲し能はなかつた。斯ういふ境遇はます〳〵博士を片意地者にしてしまつた。とかく官立學校の教授の說を攻擊する所から狂犬の如くに云はれ、非人格者の如くに罵られてゐた。甚だしい批難は先頃學界に風波を捲き起した戰國時代に關する新說に就いて起つた。

博士は全く狂犬のやうに、帝大の教授連に食つてかゝつた。博士の敵も勿論默つては居なかつた。一番烈しい手酷い批難は博士の人格に關するものだつた。博士が學位を得たのは全く當局者を胡魔化したのである。博士は恩師が死亡するや否やその机の中から論文をかつぱらつて

自分の名で出したのである。といふやうな烈しい惡口が傳へられた。

斯うした紛々たる諸説に對抗して、簑川文藏は一歩も讓らなかつた。

此の頑固な片意地な、變屈な奇人の博士は然らばどんな家庭生活を送つてゐたか。

人は誰しも博士の社會的の活躍振を見て、或は暴君のやうな主人をその家庭の人として想像するかも知れない。

若しそれならば其の想像は全く事實と正反對なものである事を玆に告げなければならぬ。

博士の夫人即ち今囘の殺人事件の被害者は百合子といひ今年二十八歳、二人の間に一人も子がなく、たつた二人きりの家庭で、博士が暴君の如く振舞ふどころか、妻百合子の我儘が博士を知る程の者には甚だ有名になつてゐたのである。

簑川百合子は大阪の生れで、倉島といふ家に生れたけれど、二十歳の時黑澤某といふ人に嫁したが間もなく不緣となり、一旦離婚した後二十五の時に改めて簑川文藏に嫁したのだつたが、非常な美人であるけれど、大變なモダーンマダムとして知られ、又同時に甚だ人目に立つ行ひなどがあつて可なり有名な婦人である。

學界では狂犬のやうに吠え立てる簑川博士も夫人にだけは何うしてだか一向吠え立てないと見え……否、吠える事が出來ないと見え、百合子夫人は博士が家に居やうが居まいが、音樂會に出掛けたり、芝居に出掛けたりして一向平氣に振舞つてゐた。

だから先刻放送局へ二度も電話が掛かつて來ても、又かといふ風で誰も別段不思議には思はない。

たゞ博士一人が氣をもんで頻りと世間から隱さう隱さうと務めてゐるやうであつた。それ故兎角いろんな噂をしたがる一部の人々は、

「博士と夫人とはまるつきり合はないやうでゐてあれで極く合つた夫婦なんだよ。詰まり博士は夫人に出來るだけ我儘をして貰ひたいのだ。まあ變態夫婦つてやつだね。」

などゝ云つたりしてゐる。

斯ういふ次第だから、女中も下男も中々居つかず、時々家政婦などを置いて二人は暮して居たやうであつた。

扨、判檢事一行が博士邸へ着いたのは夜の十時頃であつた。

ひらりと身輕に地に下り立つた古水判事、帶廣檢事は直ぐ玄關の入口に、相良警部が一行を待ちかねてゐるのを見た。

「何うだね何か手がゝりは見つかつたかね。」

と檢事。

「いやまだはつきり判らんですが、手段は絞殺ですよ。背後からいきなりハンケチか何かでやつゝけたらしい、但し兇器はまだ見付からんです。」

答へたのは警部だつた。

博士の家は小じんまりとした洋館で、玄關を開けると帽子や外套を掛ける大きなつい立てが置いてあつて內を見えぬやうに遮つてゐるが、直く左側が六疊位の洋室應接間、その反對の右側は夫人の室らしく、直ぐその先の右側の室は博士の書齋と見え大きな机や書籍が澤山置いてある。

「御案內しませう。博士の書齋ですよ、死體が發見されたのは。」

相良警部はかう云つて判檢事の前に立つて進んだ。

通された所は、廊下の右奧の博士の書齋である。果して其處に美しい百合子夫人の死體が發見されたまゝの形で置かれてあつた。

その傍に失神したやうになつて椅子に掛けて居るのが簑川博士であらう。

「私が豫審判事の古水です。とんだ事で、甚だ御氣の毒です。」

「は、私が簑川文藏です。この度はお手數を煩はして恐縮で……」

ふと古水豫審判事が聞いた。

「あの、奧さんの死體は貴方が發見されたのですか。」

「はあ。」

「そして少しも手を掛けずに其のまゝにしてある譯ですね。」

「左樣です。」

「そりや偉いですね。法律家でも中々さうちやんとやる事は出來ぬものですよ。ことに妻だの夫などが殺されてる場合など、何うも手を付けて困るものですが……。」

「いや實は私も始め何うしやうかと思つたんですが、直ぐにあの藤枝さんへ電話を掛けたら、

手を付けずに直ぐ警察へ云へと云はれたものですから……。」
「藤枝つてのは藤枝眞太郎君の事ですか。」
「は、さうです。」
古水判事は帶廣檢事を顧みて云つた。
「帶廣君、又、藤枝君と腕くらべかね。彼がこの事件をもう知つてるとは思はなかつたよ。」
「併しあの男は競爭しないからやりいゝよ。共同戰線を張るからな。」
檢事は斯ういひながら、判事と共に死體の方に歩み寄つた。
死體は其處に置かれた博士の大きな机を足の方にして、仰向きに仆れてゐた。兩手を咽喉の方に向けて握つてゐる。咽喉部には手拭も繩も卷かれてはなかつたが皮膚の傷つき工合から見て確かに、縊られた事は明かだつた。
格鬪のあとなどはなく全く背後から不意にやられたものらしい。
大きな机の上には卓上電話が置かれてあつたが之には別に異狀はなかつた。
形の如く豫審判事は直に書記に命じて死體についての調書等をとらした。

その間檢事と相良警部とは廊下に出てひそ〳〵と話をはじめた。
「玄關の直ぐ左手の應接間ですが、誰か客が來て居たらしいですよ。」
「何かそこから手がゝりになるものが得られるかも知れない。」
檢事と相良警部とは小さい應接室へはひつて行つた。
博士の書齋からキビ〳〵した古水豫審判事の聲がきこえて來る。
「では今日の事件をあなたが發見されたまでの事を一應順序に從つてお話しを願ひませうか。」
「今日の事だけですか。」と博士の聲。
「いや、御家庭の事なども無論承はりたいのですが、それはあとで承はるとして、先へ今日のことだけを話して頂きませう。」
「はい承知いたしました。」
頭の中で順序をたてゝ考へてゐたか、簑川博士は一寸默つたがやがて語りはじめた。
「今日は御承知かも知れませんが、私は放送局で午後七時二十五分から八時まで、講演をする事になつて居りました。度々方々でやつた講演で今更けいこをする程の事ではなかつたのです

が、何分素人にきかせるのでいつもの場合と一寸違ひますので、ひる頃から多少原稿などを書いて講演の用意をしてゐたのであります。

うちでは女中も下男もおきません。家政婦をおきましたが三日ばかり前に之も來なくなりましたので妻と私と二人暮しです。ひるめしは妻がどこかに電話をかけて取り寄せました。夕方五時半頃に夕めしをたべましたが、之は妻がうちで作つた簡單なものであります。

放送局の自動車は七時頃に來ると思ひましたから夕食はゆつくりとはじめました。私は酒のみではありませんが、夕食の時は少量のブドー酒をとる事にして居ます。

時間はまだあるので、くつろいでゆつくりめしを食べてゐますと、豫期に反して六時半頃に不意に放送局の迎ひが來て少々驚いたわけでした。

迎ひが早すぎたので私はいそいで洋服をつけ、講演の原稿をもつて家を出ましたがそれは丁度七時十五分位前だつたかと思ひます。

放送局についたのが七時頃だつたでせう。

應接室で茶をのみながら澤木文學士と話をしてゐますと妻から電話がかゝつて來ました。

妻は時々、思ひ出すとどこへでも私の處へ電話をかけて來ますので、大した用でもないと思ひ、兎も角も電話に出て見ると

『大阪のおつかさんが死去したのだがすぐ之から私はあちらへたつていゝか。』

といふのです。何分放送局でもあり、詳しい事をきいてゐる間はなかつたので、ともかく私の講演がすんで、私が歸宅してから、萬事相談する事にきめて一旦電話を切りました。

するとそれから約七八分たつて、いよ〳〵私が放送しようとする直ぐ前に、又百合子から電話がかゝりました。

『どうも大阪の事が氣になつて堪らないから、どうしても今夜中に出立したい。就いてはあなたも一緒に行つてくれ。』

といふ事なのです。私も少々腹が立つてゐましたから、

『馬鹿な事を餘り云ふものぢやない。ともかく俺が歸るまで待つてゐろ。』

といふ事を云つて切つてしまひました。

それから八時まで講演を放送しまして、八時すぎ放送局を自動車で出ました。

途中一寸買物をして――本屋で旅行案内を買つたのです――歸りました。

歸りますと、いつも私はベルをならしますが、妻が留守らしい時は鍵で玄關の戸をあける事になつてゐるのです。

今日は留守の筈はありませんから、ベルを度々押したのですが答へがありません。腹が立つて戸を押しますと自然に開きました。

『おや、百合子はゐないのかな。』

と思つて

『百合子、百合子』

と二三回よびましたが答へがありません。

何となく不安に思ひながら、私の書齋にはひると御らんの通りの妻の死體にぶつかつたのです。先程も申した通り前に長く檢事をして居られ今私立探偵のやうな事をしてゐられる藤枝眞太郎氏には、これまで時々御世話になつた事がありますので、ともかくあわてゝ電話をかけますと、そのまゝにして早く警察に云へと云ふ事だつたのでその命令通りに取計らひました。

藤枝さんももうぢきこゝへ見えるだらうと思ひます。」

簑川博士は、夫人の死體を發見するまでのその日の出來事を一應古水判事に述べたのであつた。

三

簑川博士が、古水豫審判事に對して、一應の說明をして居るうちに、帶廣檢事も、相良、稻尾兩警部も、書齋の中にはひつて來た。

「御話のやうすで大體わかりました。」古水判事はつゞけた。

「七時から七時二十五分までの間に奥さんは二回あなたに電話をかけて居られる。八時半頃にはその奥さんが死體となつて發見された、といふわけですな。從つて七時二十五分から八時半といふ時の間に、何者かゞ奥さんを殺した、と考へなければならない。明日は死體解剖をやりますからその邊もたしかに判ると考へますがともかく、あなたの云はれる事から考へるとさうなりますね。」

「さうです。さうして私自身としてはその時間の中に、妻が殺されたものと考へて居ります。」

この時檢事が口をはさんだ。

「簑川さん、無論御間違ひはないと思ひますが、二度かゝつた電話といふのは二度ともたしかに奥さんが電話口に出て居られたのでせうね。」

「間違ひありません。」

博士はきつぱりと云ひ切つた。

「家の中で何かかはつた事に氣付きませんか。」

「いや申しおくれました。手をつけてありませんから、どうか十分御調べを御願ひしたいのですが、どうも私の留守に客が來てゐたらしいのです。客は通常、左手の小さい應接室へ入れる事になつてゐるのですが、其處に茶碗などが出て居ります處から見ますと、どうも來客があつたとしか思へません。」

博士は自身先に立つて、判檢事の一行をその室へと案内して行つた。

應接室の中で暫く一行は何か調べてゐるやうであつたが、やがて又皆出て來た。

「それでは今夜は私達はこれで引上げる事にしませう。いづれあなたには又役所に出て來て貰ふ事もあらうし、或は警察署から調べのものがまゐるかも知れません。」

「かしこまりました。」

博士はていねいに古水判事に答へた。

歸りぎはに判事が思ひ出したやうに云つた。

「ねえ簑川さん、一寸これは聞き洩らした事だが大阪のお母さんが死亡されたといふ事は、どうして奥さんが知つたのですか。」

「……。」

「判りませんか。私の質問の意味は、一體奥さんは大阪から電報でも受けとつたのか、又は電話でゞも知らされたか。とにかく、あなたに電話をかけた時は何と云はれましたか。」

「先程も申した通り、たゞ大阪の母が死んだといふのみで、知つた手段については詳しくは聞きませんでした。それに私もあゝいふ際ですから詳しく聞いてゐる間もなかつたのです。」

「さうですか、ではよろしい。」

判事検事が、警部を現場へ殘して書記をつれて引上げようと玄關で靴をはいてゐる所へ背の高い、やせた男が、玄關をはひつて來た。

「おや、もうお歸りですかね。」

「あゝ、藤枝君か。」

帶廣檢事は何か思ひ出したと見えてつと立つて、藤枝とよばれた男と二人だけで玄關の外に出た。

「君はこゝの博士をよく知つてるのかい。」

「さあ餘りよくは知らない。僕が在職中、一度こゝの博士に關する事件を扱つた事がある。それが緣となつたか、退職後、いろ〳〵な事の起る度に僕の處へ相談に來るんだ。今夜もいきなり電話をかけて妻が殺されてゐるがどうしたらいゝか、なんて質問さ、どうも一寸馬鹿々々しいといふ處もあるよ。」

「では博士がさつき古水君に云つた事は間違ひなかつたんだね。」

「何さ？」

「死體を見ると、どこも手をつけずにすぐ君に電話をかけたといふんだ。」

「電話のかゝつた事はたしかだ。僕が證明するよ。しかし僕の所に電話をかける前に手をつけなかつたかどうかは、遺憾ながら僕には判らないね。」

古水判事も書記ももう自動車に乘り込んで待つてゐる樣子なので檢事も一寸急いだと見え帽子に手をやりながら、

「では又。いづれ……。」

「失敬します。」

藤枝はかういふと爆音を立てゝ行く自動車を見送りながら玄關からノソリ〳〵と上り込んで來た。

現場には相良、楢尾兩警部をはじめ、刑事連が死體を圍んで盛んに何事か協議中であつた。

「藤枝さんですか。あなたがもうこの事件を知つて居られる事は先程から伺つてゐました。」

聲をかけたのは楢尾警部だつた。

相良警部も一寸挨拶をしたが、どちらかと云へばよけいな人物が又現はれた、と云ふやうな

表情をした。

藤枝眞太郎はそんな事には委細かまはず、

「いや、もつと早くうかゞはふと思つたんだが、裁判所の御連中の御邪魔になつては、と思つたのでね。――それに僕は今日はたゞ博士に御悔みをいひに來たんだよ。事件の方は何も僕なんかゞ口を出す必要はあるまい。何しろ古水、帶廣兩君が來られたし、それに（といつて相良警部の方を見ながら）かういふ御歴々が來て居られるんだからね。」

皮肉とも御世辭ともつかぬことをいひながら、藤枝は書齋の敷居の所に立つて、別段死體を見ようともしないのである。

「博士は隣りの夫人の室にゐますよ。」

楢尾警部がかういふと、藤枝はさつさと、その室の戸口に立つてノックをした。

死人のやうに青ざめた博士が中から戸をあけると藤枝は、輕く挨拶をかはしたまゝ直ぐ中にはひつて來た。

「どうもとんだ事で……。」

「藤枝さん、よく來て下さつた。是非ともこの事件について御盡力が願ひたいですが。」

「今日はたゞお悔みに來たばかりですよ。それにさつき來てゐた古水判事も帶廣檢事も私の昔の同僚でよく知つてゐますが二人とも立派な腕きゝですから十分信頼なさつてよろしいと思ひます。まあ僕が出る程の事もないでせう。」

「いやさうでないですよ。どうか一つ骨折つて下さいませんか。」

「まあ一應承はるだけは承はつて見ませう。」

博士はさつき古水判事に述べた同じ事實を藤枝の前で語り出したのであつた。

藤枝は默つて聞いてゐたが、ふと云つた。

「そこで承はりたいですが、奥さんは、一體大阪の母親の死亡をどうして知られたのですかね え、電報でも來たんですか。」

「それが判らんのです、その點はさつき古水判事にも聞かれたんですが。」

「おや、古水君もそこを聞きましたか。で、あなたの御答へは？」

「やはり判らぬと申さねばならんです。百合子は、あんたの知つてる例の調子で、電話口でた

だ頻りと自分も大阪へ行きたい行きたい、と云つたばかりなんですから。」
「あなたが歸つて來られてから、電報でも室にありませんでしたか。」
「それが見出されぬのです。」
「はゝあ……。」
藤枝はこの時何か暫らく一人で考へてゐるやうであつた。
「危篤とかいふやうな電報はなかつたですか。」
「そりや、母が惡いといふ事は昨日手紙で知らせて來てゐるのです。何でも結核で、それに可なりひどいので長くはもつまいといふやうな事を云つて來ました。それともう一つ、これは實は妻にも云はなかつたのでしたが、私が放送局に出かけようとする丁度その時、ハハキトクといふ電報がはひつたので、それはこゝに持つてゐます。何でしたら見て下さい。」
博士はポケツトから一片の紙を取り出した。
「成程。あなたが出かけようとする時之を受けとつたといふのですね。つまり大阪を今日の午後出てゐたわけです。午後一時以後でせうな。……ところで妙な質問をしますが、大阪の

御病人がなくなられたといふのは事實間違ひないでせうな。」
「さあ、實は私も歸宅早々、この騒ぎで氣も顚倒してしまつてまるでそんな疑問も起さなかつたのですが、ともかく百合子の死を傳へなければならないので、大阪へ電話をかけるやうにさつき申込んでありますから、もうかゝる事と思ひますが……。」
丁度かう云つてゐる際、書齋の卓上電話がチリ〳〵となる音がした。
そこにゐた刑事が受話器をとる樣子だつたが、
「大阪から？……。」
といふ聲が聞えて來た。
博士が思はず立上らうとすると、何思つたか藤枝はそれを制しながら
「こちらの用件は奥さんの事を傳へればいゝのですか、それだけですか。」
といつて、自分で立つて電話の方へ行つた。電話は果して大阪が出たのである。
「はあ、さうです、簑川の者です。簑川文藏の家です。」
藤枝は相手を一寸をたしかめてゐるやうだつたが、やがて、キビ〳〵と事務的な口調で、順

序を立てゝこちらの慘劇を傳へてゐるやうだつた。
今度は向うの樣子を聞いてゐるらしかつたが暫らくして電話は切れたらしく、藤枝は再び博士の處へ戻つて來た。
「何だ簑川さん、大阪へさつき電話をかけて病人の樣子をきいたさうぢやないか？」
「誰が？」
「簑川さん、あなたがさ。」
「そりや怪しからん。私は今まで大阪へなんか一度も電話をかけた事はないです。……むかうでさう云ふんですか？」
「さつき夕方あなたから訊かれた時午後三時すぎ、母倉島はまが死去したと申し上げた筈だといふのですよ。」
「そ、そりや全然おぼえがない。」
「兎も角むかうぢやさう云つてゐます。あなたは全然覺えがないと云ふんですね。こりや、こに一つの不思議な事がおこつた。……あ、それから奥さんの事を知らせたら大きに驚いてゐ

たやうですが誰かとりあへず、上京するさうですよ——電話に出た相手ですか、殺された奥さんの妹さんださうです、仲井さんと云つてゐましたよ。」
藤枝はかう云つて、徐ろに一本のスリーキヤツスルに火をつけた。
一方、警部連は皆頭を集めて熟議をしてゐた。
相良警部と稲尾警部とが二人で話をしてゐる、
「第一の疑問は何で絞殺したかといふ點だ。無論あしたの解剖を待たなくてははつきりした事が判らないけれども、咽喉部の擦傷などによつて絞殺死體たる事は明かだが、それにしてもその兇器がどこにか行つてしまつてゐるのはをかしい。ね君はどう思ふかね。」
相良警部は稲尾警部を顧みて云つた。
「同じ疑問がやつぱり僕の頭にあるんだよ。それは、どうも博士自身のいふ事が時々曖昧になるのがをかしいよ。古水判事も餘り博士のいふ事を信用してはゐないやうだつたがね。」
「何しろ死體の第一發見者が博士で、その博士以外には誰もその時を見てゐなかつたのだからな、……それにこの死體の樣子は……。」

相良警部はこゝまで云つて急に口をつぐんだ。楢尾警部はこの時の相良警部の言葉の調子に何か早くも、或る決心を見てとつたのである。

その時、藤枝眞太郎が博士と一緒に書齋のところに現はれた。

「一寸近くから死體を見せて頂きたいですが。」

藤枝はかう云ふと、死體のところに行つて暫らく前こゞみになつてじつと見つめてゐた。が、急に右手を出して死體に觸れて見た。

「こりや、一寸をかしい。」

と一人口の中で呟いた。

「ぢや今日は失禮しませう、簑川さん、僕の所にこのごろ井上道夫といふ探偵志願の若い男がゐます。この男をちよい〳〵よこしますから、何か又新しい事があつたら知らせて下さい。では皆さん、失禮します。」

かういつて藤枝はさつさと玄關の方へと立去つた。

後から追かけたのは、楢尾警部だつた。

「あなたには大分お目にかゝりませんネ。いつかの牛込の御寺の殺人事件以來ですな。如何です、御見込みは？」

藤枝は下駄をつゝかけながら警部に云つた。

「藤枝さん、こちらから御見込みをおたづねしたいんですよ。あなたの腕前はもうよくこの前の事件で知れてゐます。どんなものでせう今度の事件は。」

「あはゝゝゝゝ。僕なんかにさうたやすく判る位ならあなたなんかにはもつと早く判つてるでせうな。駄目ですよ、僕にはまださつぱり判らんです。」

「藤枝さん、あなたあの死體の硬直をはつきり見たでせうね。」

「無論ですよ。」

「では何故博士はあんな事を云つてるのでせうね。」

「さあ、それを調べるのがあなた方の務めぢやないんですか。……あ、さう〳〵もう一つ材料があります。さつき僕が大阪と話しをしたでせう。あの時ね、大阪の方では、簑川博士が五時頃にむかうに電話をかけた、と主張してゐますよ。」

「ほんとでせうか。」
「さあ、それも一寸判らんですね。」
「いづれ明日でもあなたの事務所へ上るかも知れません。」
「どうか、いつでもお待ちします。」
藤枝はかういひながら帽子をかぶり外套をひつかけて、玄關から出ようとしたが、又楢尾警部の方を見て小聲で云つた。
「どうしても解かなけりやならぬ問題がこゝに二つありますよ。一つは博士の夫人が如何にして母の死を知つたかといふ事です。もう一つは、博士が何故あんな嘘を云つてゐるか、といふ事です。」
「ではあなたも博士が……。」
「いや私は、たゞ博士が嘘を云つてゐる、といふのですよ。」

四

藤枝眞太郎は丁度古水判事、帶廣檢事と年輩は同じ位、かつてはこれら二人と共に裁判所に勤めて居た事もある人物である。在職中藤枝檢事といへば、あの鬼檢事かと云はれて犯人達に恐れられたものである。
それが何を感じたか今から五年程前に突然辭表を出して退職してしまつた。多くの判檢事がやめるとすぐ辯護士と變るので、世間では藤枝檢事からぢきに藤枝辯護士が出來上ると思つてゐたのに反し、一向に藤枝は、辯護士名簿に登錄しようともしない。そのうちに銀座の裏通りに小さな洋室を借りて、私立探偵藤枝眞太郎といふ看板をかゝげはじめた。之は彼が退職後二年ほど經つてからの事であつた。
もう四十になるといふのに、獨身で、高臺の家には老母とたつた二人暮し、用があると時々銀座のオフィスに姿を現はすのである。
別に大して流行つてゐる樣子もなく、又大事件に飛込んでしこたま金を儲けたといふ話も聞かないから、まづ私立探偵業も半分道樂にやつて居ると云つてよろしからう。
道樂といへば學生時分から文學哲學の本を讀む事と、音樂の好きな事は有名なもので、この

方面に於ける彼の知識は相當なものだと云はれてゐるが、一度もまだ世の中にその蘊蓄を發表した事はない。

こんな風だから、餘り自分で宣傳しないけれ共、時々事件が來る。又時々自分で事件に乘り出して行く。手錢で事件に飛び込むあたりは可なりこつちの道樂も強いと云つてよろしからう。

博士邸の慘劇のあつた翌朝、珍らしく早く起きたと見え、藤枝事務所の一室には、既に二人の男が相對坐して話してゐる。

一人はオフイスの主人藤枝眞太郎で他の一人は私立探偵志願の井上道夫といふまだ二十四五の青年。

藤枝は、シガレツトをやけにくゆらしながら井上青年に話しかけて居る。

「それだからね、君、此の事件からは、まづ確かな點だけを取り出して見る必要があるのだ、正に間違ひのない事實、といふものは今度の事件の中で割に少いんだよ。」

「先生、簑川博士が放送局に七時から八時までゐた事は間違ひないのでせうね。」

「うん、それは間違ひがないらしい。そこで博士の供述によれば、妻百合子が七時から七時二

十五分までの間に二度放送局に電話をかけて來たといふのだ。して見ると、博士の妻は少くも七時二十五分から八時半の間に殺された事になる。それで君に一つ大事な用を頼みたいのだ。つまり放送局に二度電話がかゝつたかどうかといふ問題なんだ。それが被害者からかゝつたものかどうかゞ解ればなほいゝのだけれど、こいつまでは一寸判らないかも知れん、それからもう一つ、迎ひに行つた自動車の運轉手に聞き糾して來て貰ひたいことがある。それは昨日博士を迎ひに行つた時、中から誰が戸を開けたかといふ事、及び博士が自動車に乘つた時、夫人が玄關まで送つて來たかどうか、といふ事を調べて來て貰ひ度いんだ。僕はこれから大學へ行つて死體の解剖を見せてもらつて來るから……。」

藤枝はかういふと井上青年を促して一緒に外に飛び出して行つた。が、彼は二時間ばかり經つと、楢尾警部と共に疲れた樣子をしながら戻つて來た。

「藤枝さん、やつぱり思つた通りですね。」

「何がさ。」

「百合子が殺されたのは午後七時二十五分以後どころではありませんね。少くとも正午頃だと

いふ醫者の診斷だつたではありませんか。」
「そりや君もあの時氣がついてゐたらうが、僕もあの死體を一目見るや否や、おそろしく硬直してゐる事に氣がついたんだ。だから、僕には、博士がどうしてあゝいふ嘘を云ふのか一寸判らなかつたんですよ。」
「そりや博士が……。」
「さうかしら。さう簡單に博士が犯人だときめていゝのかしら……それにしてももしさうだとすると博士はどうして大阪の倉島はまの死を知つたらう。」
「そりやあなたが云はれた通り、昨日博士自身が大阪へ電話をかけたつて云ひますから、それで話は判るやうに思ひますが……。」
「それでたしかに說明はつく。しかし絞殺した手拭が見えぬのは？」
「無論博士がかくしたと考へるより外はない。」
「そこだよ君。」
藤枝が强く云つた。

「博士が自分で殺したとする。又博士自身の供述を信じても、手拭をかくす人間は博士以外にはなさゝうに思はれはする。しかし、あの場合、博士がわざ〳〵兇器を隱すといふのは甚だ愚かなことではなからうか。ねえ稻尾君、こゝをもう少し考へて見るわけにはいかんでせうか。」
「いや、勿論私とて博士を犯人ときめてゐるわけではありません。それ處か、近々有力な嫌疑者を捕へるつもりではゐます。」
藤枝はプツと煙を吐き出しながら云つた。
「何故博士があゝいふ嘘をついてゐるか。といふこと、それから、どうして博士が倉島はまの死を知つたか、この二つの疑問さへ解決すればこの事件は割に早く解ける筈なんだ。」
藤枝はかう云ひながら、何か考へるやうに暫らく默してゐたがこの時、井上青年が外からはひつて來た。
「稻尾さん、これはこのごろ僕の處へ私立探偵の弟子入りに來た青年で井上道夫といふ者です。どうかこれからも僕同樣御引立を。……井上君、この方が有名な稻尾警部だよ。」
一應の紹介が終ると藤枝は早速用件を聞きはじめた。

「放送局の方はよく判りました。博士の云ふ通り、たしかに自宅からと稱する電話が二度かゝつたさうです。無論先生も云はれたやうに、それがたしかに夫人からかゝつたものかどうかは誰にも判らないつていふ事ですが……なほ、博士は、澤木文學士に、電話の内容を一寸云つたさうでこれは局員が、室から出がけにちらと聞いたと云つてゐます。何なら澤木文學士について聞いて見ようと思ひます。それから自動車の運轉手について例の事を聞いて見ました。玄關でベルを鳴らしても中々人が出て來なかつたさうです。度々鳴らすと博士自身がだらしのないなりで出て來たさうですが……。」

「一寸、だらしのないなりといふのは？」

「何でも、寢間衣姿のやうだつたと云ふのですが、褞袍でも着てゐたのでせう。さうして『何だ、放送局からか、馬鹿に早いぢやないか、暫らく待ち給へ、』と云つて又戻つたさうです。」

「夫人は全然出て來なかつたのかね。」

「全然出て來なかつたさうですが、何でも、女の人らしい聲は聞えたさうです。それも泣聲みたやうなものが。」

「何、泣聲？」

「さうです。そんなやうな聲が聞えたさうです。運轉手も別にへんには思はなかつたさうですよ。何でも三ケ月ばかり前にやつぱり一度博士を迎ひに行つた時、夫人のヒステリー振を見たさうですからね。」

「さうして送つて出ては來なかつたのかね。」

「送らなかつたさうです。外の家なら主人が出て來るのに夫人が送つて來ないので不思議に思つたかも知れませんが、何分相手が簑川博士の夫人の事ですから、運轉手も少しも驚かなかつたさうです。」

「あゝさうか、ふーん。」

藤枝は何か又暫らく考へてゐたやうであつた。

この時樹尾警部も亦何か思ひ出したやうな樣子で

「では今日はこれで失禮します。又何か御厄介になるかも知れません。」

と云ひながら、急いでオフイスを出て行つてしまつた。

「先生、何か變つた事が又見付かりましたか。」
「いや別に。たゞ死體に不思議な所があるのだよ。」
「では、もつとずつと早くにでも殺されたんでせうか。」
「まあさう思はれてゐるんだ、しかしそんな事は今更解剖して後に分つたことではない。僕はあの死體を一目見た時からこれは今一寸前に殺されたのではない、と判つたんだ。同じ事は相良、稲尾兩警部も考へてゐるらしい。古水豫審判事もちやんと考へてゐるらしいんだ。警部から聞いたが、古水君はこの疑問を相手の博士に悟られないやうに、あつさりと訊問してゐる。流石は古水判事だよ。」
「すると博士が放送に出かける時に、夫人はもう死體となつてゐたといふ事になりますね。」
「さうさ。」
「では博士は明かに嘘を云つてるのですね。」
「さうだ。」
「やつぱり博士がやつたんでせうか。」

藤枝はこの時、この愛すべき青年の顔を見ながら優しく云つた。
「さう簡單に片付けてはいけない。博士はたしかに嘘を云つてゐるらしい。しかしそれだから と云つて直に彼を犯人だときめては困るよ。無論博士に一應の疑ひをかける事は仕方がないけれ共。」
「ではなぜ、博士が嘘を云ふのでせう。」
「さあそこだテ、僕もその點を昨夜から考へてゐるのさ。この點さへはつきりと、きめてしまへばこの事件は半分判つたやうなものだ。ねえ井上君、君も考へて見たまへ。博士は何故あんな嘘を云つてゐるのだらう。」
「……。」
「いゝかい、博士自身が犯人だといふ場合は別だよ。今博士が眞犯人を知つてゐる、と假定する。無論これは一つの假定に過ぎない。それでゐて博士はあんな變な事を云つてゐるんだ。而もそのために博士は甚だ不利益な狀態に陷つてゐるといふわけなのだ。井上君、これはどういふわけだらう、考へがつかないかね。」

「犯人が何か博士と深い關係でも……。」

「さう、たしかにそれは第一の考へ方だ、君は犯罪學の本を讀んでゐるかどうか知らないが、もし博士が女の人だつたらこの場合、博士は眞犯人をかばつてゐると考へるのが一番正しい考へ方である。而してその犯人と博士との間には深い愛情の關係があるとしなければならない。ところが博士は女ではない、だからたゞその方面にばかり眞犯人を求めるのは少々手おちだと思ふのだ。ねえ、君、そこが判るかい。」

「どうもその他の點はよく判りませんが……。」

「博士が犯人をかばつてゐるのは、必ずしも犯人を愛してゐるが故ばかりではないよ。かういふ事は考へられぬだらうか、つまり博士は犯人をかばふ事によつて自分の家の名譽を保たうとしてゐるのだと、ね。」

「といふと、どういふ事になりますかね。」

「判らないかね君には、例へばだね、こゝにある男があつて、この男と博士の夫人とが懇意であつたとするんだ。いや懇意以上の關係にあつたとするのだ、この假定は、博士夫人の平生から考へると必ずしも荒唐無稽な想像ではない筈だ。ところが博士は何かの理由でこの二人の間の事を知つてゐる。しかし名譽を重んずる博士の事だから誰にも云ふわけにはいかない、一人で悶々としてゐた。すると、夫人と男の間に何か起つて不和になる。まあこの場合、痴情とでもいふんだらう。この結果、夫人が昨日博士邸で殺された。まあ時間はわれ〳〵の考へ通り晝頃でもよし、或は博士のいふ通り、夜でもいゝんだが、この場合、博士は、果して眞犯人の名を輕々しく擧げるだらうか。君はどう思ふ？」

「それはまあはつきり云はないかも知れませんね。」

「だから僕は博士が眞犯人を知つてゐて、若くは推察してゐて、だまつてゐるのぢやないかと思ふのだ、たゞ僕の恐れるのは、博士が眞犯人と考へる所の人間がほんとに犯人でなく、他に犯人がゐる場合即ち、博士が誤解して犯人を考へてゐやしないかといふ事だよ。」

この時、卓上電話がチリ〳〵と鳴つた。

「先生、稲尾警部からです。」

急いで受話器をとつた藤枝はすぐに稲尾警部と話しはじめた。

「え、相良警部が嫌疑者を捕へた？　何、身柄は未だ押へないけれども有力な嫌疑者だつて。何、黒澤、黒澤玄吉？　あゝ夫人の先の夫ですね。何か有力な證據があるのでせうな、わざ〳〵どうもありがたう。」

話を切つて彼は一人つぶやいた。

「ふゝん、これは面白くなつて來たぞ。どうなつて行くか、一つ相良君の腕前を拜見するか。それにしても、相良君がいきなり博士を疑つてかゝらないのは妙だ。」

「先生。」

藤枝の獨り言を聞き咎めて井上が云つた。

「相良警部は無論博士を疑つてゐますよ、放送局へも私より先廻りして行つてるやうですが、まづ第一に博士を疑つてゐるやうです。」

「さうかい、それがあたり前だ。――さてと、もう四時半だね、君もそろ〳〵歸つていゝよ。又あしたこちらで會はう。あゝさう〳〵歸る前に一寸、簑川博士の所へ用はないかつて電話で聞いてくれ給へ。」

「承知しました。」

井上はしきりと簑川博士邸へ電話をかけてゐたが、暫らくして藤枝の前に來て云つた、

「さつき大阪から電報がまゐりましたさうです、何でも仲井さんつて方が今夜東京へお着きになるさうで、博士邸へ見えるさうですから、夜九時頃先生にも來ていたゞきたいつていふ事です。――仲井さんつてのは死んだ博士夫人の妹さんの嫁いでゐる所ださうです。」

「いやどうもありがたう、ぢや夜、又僕は博士の家まで行つて來るよ。楢尾警部をさそつて行つて見よう。」

五

其夜九時すぎ、藤枝眞太郎は楢尾警部と二人で話をしながら、寒い道を、簑川博士の邸の方に向つて歩いてゐた。

「ねえ楢尾君、相良警部はどうして急に黒澤玄吉に疑ひをかけるやうになつたんだらう話してくれませんか。」

「やつぱり相良君らしい機敏なやり方なのです。僕も相良君の早業には感心してるんですよ。あなたも御承知の通り、此の事件ではじめつから何となく怪しいのは簑川博士自身です。あなただつてさう御考へでせう。はじめからい〻加減な事を云つたりして怪しい所がたくさんあります。」

「さう、それは全く僕も同感だ。たゞお互ひが博士に手をつけないのは、怪しいといふ以外に一つも、はつきりした事を摑まないからなんだ。博士が如何して妻を殺したか、その動機は何か？　そんな事がまるで判らないから手を出さないだけで、あの博士が相當の曲者である事は僕も同感ですよ。」

「藤枝さん、相良警部は先づ昨日の博士邸の事件を博士を怪しいと見てそこから出發したのです。われ〳〵が見た時の死體の硬直、更に大學での醫者の診斷書等から見て、簑川百合子は昨日正午から午後一時頃までの間に殺されたものである、といふ事が判りました。われ〳〵が見た時既に死後八時間乃至九時間を經てゐた。さすれば博士が放送局に出かける時には夫人はもう死んでゐたに違ひないのです。ところが、あなたが御調べになつた時も御判りの通り、放送

局から迎ひが行つた時に、誰も送つては出て來なかつたが、女の聲が奥で聞えた、といふ事實、之は自動車運轉手がはつきり云つてゐますが、かういふ事實がある。更に博士が放送局に行つてから、二回も、うちからと稱して電話がかゝつてゐます。之は給仕がたしかに女の聲を聞いてゐますから確かです……。

數時間前に死體になつた百合子が、簑川博士に電話をかけるなどゝいふ事は有り得ない事です。ではこの女は何者でせう。相良警部の考へは實にこゝから出發したのでした。」

「つまり、それが博士と共犯者で、博士のひそかな戀人とでもいふんだらう。大方相良警部の考へ方はかうだらう。」

「さうです。正にその通り。」

「僕もそこまでは相良君の考へ方に異存はない。相良警部の考へ方は中々いゝ。しかしね、楢尾さん、あの博士にはそんな女はありませんよ。」

「おや、よく御存じですな、もう調べましたか。」

「楢尾君、僕にだつて相良警部位の頭はあるよ。すぐ調べて見たんだ。しかし世の中の評判通

り、簑川博士にはたしかにそんな女はこの世の中に一人もゐない。たつた一人知つてゐる女といへば、數日前まで來てゐた家政婦の大場さよ子といふ二十四になる女だけれども、博士と大場の間に何かあると思ふのは當らない。……」

「いやそれまで知つてゐられちや、云ふ必要もないのですが、相良君はやはり大場さよ子といふ女をつきとめたらしいです。さうして一方博士と大場の間を疑ひながらも、大場の言葉から何か得るところがあつたらしいんです。」

「すると黒澤玄吉が疑はれるやうな事を、大場が相良警部に云つたわけなんですね。」

「まあさう考へるより他ありませんな。」

こんなことを語り合つてゐるうちに二人はいつの間にか博士邸の前に來てゐた。

「大阪から誰か來てゐる筈だから早速いつて見ませう。さうして、わけのわからないあの『博士から大阪への電話』の正體を聞いて見ようぢやありませんか。」

藤枝はかう云ひながら先へ立つて案内を乞うた。

昨日からのさわぎで、一睡もしないといふやうな顔をしながら、博士は、でも救はれたやうな樣子で迎へに出て來た。

「藤枝さんでしたか。おや楢尾さんも御一緒に？　丁度大阪から今親戚の者もまゐりましたからどうか一度御會ひ下さいまし。」

昨朝死體の置いてあつた書齋はもうすつかり片付けられて、藤枝がそこにはひると三十七八の男が丁度挨拶に出て來ようとする所であつた。

「私の義弟になります。亡くなつた百合子の妹の亭主で、仲井長太郎と申します。こちらが藤枝眞太郎さん、こちらが楢尾警部。」

簑川博士が一應三人を紹介した。

仲井とよばれた男はおとなしい、眞面目さうな顔をした紳士だが紹介されると丁寧に挨拶した。

「之は初めまして。私仲井長太郎と申します。大阪で藥物の研究をやつて居ります。何とぞよろしく。」

「私が藤枝です。此度はどうもとんだ事で。博士には平生から御懇意に願つて居ります。……

今度の事ではさぞお驚きになつたでせう。」

「ゆうべ電話をおかけ下さつた時丁度妻が出まして、承はつて皆ひつくり返るばかりに驚いてしまひました。私は丁度一昨日から風邪で大阪の郊外の自宅にひきこもつて居りましたが、この變事を聞きまして取るものもとりあへず、今日の上りのツバメ號に乘つてやつて參つた次第で……。」

「さうですか……隨分お驚きだつたでせうな。」

「簑川もすつかり氣が顚倒して居りますんでさぞ、妙な事を申上げたらうと存じますが、ともかく一刻も早く犯人を捕へていたゞきたいと存じまして……。」

「その點はわれ〳〵も職業柄必死になつてやつてゐますよ。」と稻尾警部が口を出した。

「全く、稻尾君などは必死ですよ。僕はまあ簑川さんから萬事を委せられたので、寧ろ善後策を講ずる方で、犯人を追ひかけるといふ方ぢやない。」

藤枝が一寸笑ひながら云つた。

「どうして、中々以てさうでないですよ。私なんかこれまでたび〳〵藤枝さんには出し抜かれ

てゐるんです。」

稻尾警部が云ひ終るのを待つて仲井がシガレットの煙をさかんにはきながら口を切つた。

「如何でせう、犯人の御見込みはもうついてゐるでせうか。こんなことをうかゞつてもよろしいのかどうか判りませんが……。」

「さあ……。」

稻尾警部は藤枝をかへりみた。

「どうも中々むづかしい事件ですよ、殺された死體に大分怪しい所があるのでね。」

藤枝はかう云ひながら何げなく博士の方を見た。

「へえ？　怪しいと申しますと……何か、殺された時間の點にでも……。」

「さうです。推定時間が中々むづかしいばかりではありません。絞殺らしいくせに、何で縊つたかゞわからないんですよ。をかしいぢやありませんか。」

「成程……事件の方はわれ〳〵にはよくわかりませんから凡ておまかせ致しますが、昨日も大阪で相談いたしたんですが、此度なくなりました妻の母の、倉島はまと申す女は、相當の遺産

を殘して居りますので、出來るだけの事は皆でお盡しするといつて居ります。どうか何分ともによろしく御願ひ申上げます。」

この時、簑川博士は、藤枝に對して小聲で何か囁いた。

「では、あちらでお話しませう。」

藤枝はさきに立つて小さな應接室に入つた。こゝで彼は簑川博士とさしむかひになつたのである。

「丁度今も二人で話して居りましたんですが妻の母は一寸した金持でしてね、三四十萬の金を殘したんです。あとつぎと云つては誰もないのですが、この財産は一體どういふ風に始末いたせばよろしいのでせうか。」

「ほゝう、そんなお金持ちだつたのですか。それで全然後嗣はないのですか。」

「はあ……。」

「お母さんが女戸主だつたかどうかといふ事で相續問題が別になつてきますね。」

「はあ……ともかく遺産はどちらへ參るんでせう。」

「詳しく調べて見ないと簡單に、これはかうといふ事は出來ないですね。しかしなくなつた奥さんとその妹さん卽ち仲井さんの奥さんの二人の所に遺産が行くと考へていゝでせう。たゞ奥さんが不幸にしてなくなられてしまつたから妹さんの方にその財産は行くわけでせうね。」

「でも今仲井が私に申す所では、母の方が先に死んで私の妻があとで死んだのですから、夫たる私に、妻が嗣いだ財産が來ると申すのですが……。」

「奥さんの方があと？……」

藤枝はこの時ちらと博士の顔を見た。

「奥さんがあとでね……成程。」

「藤枝さん、無論私は假りに妻の所に來るべき財産が私の手にはひつても、その權利は拋棄するつもりです。こんな不幸のあつたために私が一錢でも得をするのは不愉快です……たゞ仲井が一應先生にうかゞつて見てくれといふので一寸お訊ねしたまでゞすよ。」

藤枝が何か云はうとした時、應接間の戸を外から叩く者があつて戸は直ぐ開かれた。

表はれたのは仲井長太郎である。

「義兄さん、警部といふ御方があなたと一寸お話したいさうです。」
「では私は一寸あちらへ行つてゐませう。」
藤枝はかう云つて室から出つて行つた。入違ひに相良警部が應接室へはひつて來た。
書齋では稲尾、藤枝、仲井の三人が、ストーブを圍んで話をしてゐる。
「仲井さん、大阪で亡くなられた倉島さんは大變な財産家だつたさうですね。」
「おや、簑川はそんな事はもう御話したのですか。」
「話したばかりではありません、博士はその遺産がどこへ行くか心配してゐましたよ。」
藤枝はちらりと仲井の顔を見た。
「義兄は慾のない人間です。心配してゐても自分の爲めではありますまい。ことに自分のものになるにせよ、一錢ももらはぬと云つてゐます。」
「それは私も今承はつたばかりです。たゞ四十萬といふ財産は人の一人や二人の生命には十分釣り合へるものですよ。」
藤枝はかういひながらシガレットの煙を天井に向つてぷーッと吹いた。

「それで、その財産は誰の處に行くんですね。」
稲尾警部が眞面目くさつて藤枝に訊いた。
「詳しく聞かないからよく判らないけれども、遺産相續が起るらしいんだ。倉島はまには後嗣がないらしい。こゝの死んだ奥さんとこの仲井さんの奥さん二人が娘さんさ。だからこの二人に來るんだらうな。」
「そのうち簑川博士の夫人の方は死んでしまつたから……」
「だから問題は……」
藤枝はかう云つて仲井の方を一寸見た。
「母がさきに死んだか、娘がさきに死んだかといふ事だ。大阪のおつかさんが死んだ時、博士夫人は生きてゐたかどうかといふ事さ。」
此の時博士が突然書齋の入口に表はれた。
「相良警部が、稲尾さんと藤枝さんにお話したいと申して居られますが、こゝへおつれしてかまひませんか。」

「どうか。」
仲井は遠慮して室を出た。
やがて相良警部がはひつて來た。
「や、御兩君、御精が出ますね。」
「相良さん、あなたこそ大變でせう、承はればもう捜査が大分進んださうぢやありませんか。」
相良警部は、急に聲をひそめて二人に語り出した。
「實は私にも未だ確信といふほどのものはないのですが、ともかく嫌疑者らしいものにやつと目をつけはじめたんですよ。」
「嫌疑者といへば先づ第一にあげなければならぬのは、簑川博士自身ぢやないですかね。」
藤枝が云つた。
「それは無論さうです。稻尾君にしろ、私にしろ未だ博士に手を出さないのは、博士の位置が何分相當高いのと、まあ逃走などの憂へがなささうだからなのです。何しろ、博士が唯一の死體の發見者で、而も供述が隨分變なのですから、まあ普通なら博士をいきなりとつちめるとこ

ろですがね。」
「全くね、これが探偵小説だつたら讀者が迷ふでせうよ。」
藤枝が笑ひながら云つた。
「何しろ、しよつぱなから博士が何となく怪しいくせに、あなた方御兩名がちつとも手を出さないんだもの、これが直ぐ捕へられるんだと讀者も『はゝあ、これは犯人ぢやないな』と思ふけれどもね。」
相良警部も稻尾警部も思はず苦笑せざるを得なかつた。
「まあ、それはさうとして私は大場さよといふ女を取調べたんですが……。」
「あゝ、家政婦ですね、二三日前までこゝにゐた。」
「さうです。實はこの女が今度この事件に相當關係してゐやしないかと思つたんでね。ところがどうも餘り怪しい所はないのですよ。」
「怪しいといふのは、當日大場がこゝに來て居たか、又二度も放送局へ電話をかけたりしたかどうかといふ事なのでせう。」

「さうです。こゝに居なかつた事については明かにアリバイがあるのでこれは問題にならん、たゞ電話はどこからでもかけられるものだからこれは疑へば限りがないのですが。それよりこゝに有力な嫌疑者が表はれた。例の夫人の先夫黒澤玄吉といふ男、これは今までに一回、詐欺横領でやられた事のある男ですが、これが最近博士夫人に又大分接近してゐた、いや接近してゐたばかりではない、何か脅迫らしい事をしてゐた、さうして何でも昨日、即ち兇行當日いよ〳〵黒澤と夫人とが最後の會見をするわけになつてたらしい。その前に黒澤が博士の留守に來た時、

『よし、今度いふ事を聞かなければほんとに殺してしまふぞ、後悔するな。』

と夫人に云ひながら歸つて行つたのを、大場が傍で聞いてゐたといふのです。

あの時間に誰か來客のやうすがあつたといふのは黒澤なんですよ。黒澤はもう一度明日、本廳へ來るやうに云つてありますが、今までの自白といふものが實に不思議です。」

「とは又どういふわけで。」

「博士と同じ嘘を云つてゐます、午後七時頃に夫人がちやんと生きてゐて彼と話したといふやうな事を云つてゐますよ、私は實は御兩君の御智慧を拜借に來たんです、明日何でしたら黒澤のいふ所を聞きに來て下さいませんか。」

六

簑川博士邸を訪問した翌日の朝早く、即ち三月十二日の早朝、藤枝眞太郎はいつものやうに、床の中でまだゆつくり夢を見てゐる所を、仲井長太郎の訪問を受けた。

「失禮しました、實は今まで寢てゐたんでね。」

藤枝はしばらく仲井を待たせてから、ねぼけたやうな顔でやつと仲井のゐる應接間に入つて來た。

「朝早く御訪ね致して申譯ございません、昨夜は又失禮致しました。」

「仲井さん、御風邪の處を押して御上京なさつたといふのに中々大變ですね、餘り無理をなさらない方がいゝですな。」

藤枝はかういひながらテーブルの上に置いてあつた、煙草入の中から一本の葉卷をとり出して、仲井にすゝめると、自分も一本取つて早速火をつけてすひはじめた。

「實はいろ〳〵心配な事がございますので、こんなに早く御騷がせ致したやうな次第で……。」

仲井はかういひながら、輕く會釋をしながらすゝめられたシガーに火をつけた。

「はゝあ、何か又起りましたか？」

「いや、別に新しく起つたといふわけではありませんが……。」

仲井は一寸いひにくさうに、默つて煙草の煙を天井へ盛んにはき出した。

「實は義兄の事なんですが、……どうも義兄が何となく皆さんから怪しまれてゐるといふのが私としましてはまことに心にかゝるのでして……。」

「へえ？　誰かそんな事をいひましたか、簑川博士が怪しいつていふやうな事を相良君か稻尾君が申しましたか。」

「いえ、別段うかゞつたのではないのです。簑川自身も或は別に何とも思つてゐないのかも知れません。しかし私には何となくさういふやうに考へられますので。」

「ゆうべ九時過ぎに東京に御着きになつたばかりでよくみなの氣持がお判りですね。あなたは中々探偵眼がおありになる。」

藤枝は一寸ひやかしたやうな調子で仲井に云つた。しかし仲井は少しもそれに驚かず不相變眞面目に續けた。

「昨夜お目にかゝつた中で相良稻尾兩警部はいづれもその筋の方だし、公務を行つてゐられるわけですから、私に少しもその捜査のやうすを云つて下さいませんが先生なら私立探偵でいらつしやるから或は御意見を御洩しねがへるかと存じましてうかゞひましたのです。」

仲井の顏には、親戚の不幸を心から憂へてゐるやうすがあり〳〵と浮んでゐた。

「さうですか。……とおつしやられても一寸困りますね、僕には別に意見なんていふものはまだないんですからな。」

「先生みなさんはほんとに義兄を怪しいと考へて居られるのではないのですか。」

「さあ、何とも云へませんね、しかしともかく簑川博士の今云つてゐる事の全部が當局者に信じられてゐるかどうかは疑問でせうよ。」

「如何でせう。この際私から兄のために一言申上げておくのは、何の意味もないでせうか。」

「そんな事はありませんよ。なるべくさういふ事はお聞かせ下さつた方がいゝのです。あなた

がおつしやらないでも私から、檢事局なり警察なりへ傳へておきますから、參考には十分なります。――實は私も博士とは前から知合にはなつてゐますが何分あなたのやうに親戚といふわけではなし、まあ何か法律問題が起つた時にばかりちよい〳〵會つてゐるに過ぎないのですから、詳しい事は餘り知らないのですよ。どうか御聞かせ下さい。」

藤枝はかういひながら、仲井に出來るだけ氣やすく話が出來るようにひどくくつろいだ樣子を見せた。

「では申上げませう。」

仲井がぼつ〳〵語り始めた。

「最初に申上げておかなければならぬのは、義兄簑川文藏の性格です。御承知の通り、義兄は甚だ角のある人間でして、兎角他人と喧嘩をしたがる男ですが、決して惡い人間ではありません。それに、學者だけあつて、物質の慾といふものは全然ありませんのです。これはさし出がましい事を申上げて恐縮ですが、もし今度の事件で、兄がその妻をどうかしたのではないかとの御疑ひならば、それは全然おとりけしを御願ひしたい。第一兄は妻が殺された時には放送局

に居た事はたしかなのですから。どんな事があつてもこの點は間違ひありません。」

「博士が放送局にゐた間に夫人が殺された事が確だとすればですね。」

「おや、確だとすれば、ですか。確かではないのですか。」

仲井は驚いたやうに藤枝を見た。

「確かどうか判りませんね。何分かういふ事件は凡て斷言する事は危險です。だから私は一應確だとすれば、と申すのです。」

「では確だとすれば、ではよろしいのです。さすれば博士が妻を殺すといふ事は不可能だつた筈です。」

「仲井さん、こゝにもう一つ假定が入用ですよ。即ち、もし右の事實がたしかだつたとすればですね。博士は自ら手を下す事は不可能だつたと云はなければなりませんが博士が人に賴んで妻を殺さうとすれば、博士がどこにゐたつて出來た話なんですからね。」

「先生、さう御疑りでは困りますが……では私はどんな事があつても兄が妻を殺す理由のない事を證明しませう。第一はさきにも申上げた通り、兄は利慾の心が極めてうすい男です。兄は

妻が死んだので損こそしても決して得はしてゐませんよ。」

「それはどういふわけですか。」

「私は法律の事はよく存じませんが、大阪の倉島はまですが、あれは約四十萬ばかりの財産を遺してなくなりましたのです。從つて、その財産は兄の妻と私の妻の二人に殘されるわけださうです。それ故、兄としては妻を失つてしまふといふ事は大變な損失ではないでせうか。」

「それは博士夫人が倉島はまより一分でも先に死んだ場合ですね。しかし博士の說ではははまの死後夫人が生きてゐた事になつてゐますよ。はまが死んだのが十日の三時頃、夫人の死んだのが午後七時半頃だとすれば、博士は決して損をしてゐるとは云へません。」

「しかし兄ははまが死んだ事をしらなかつた筈ですが。」

「それもさうですね。」

藤枝は何か氣のなささうな返辭をした。

「利慾の方面はさうとして、次にその他の理由を考へても決して兄は妻に手を出すやうな人ではありません。これは餘り大つぴらに申すわけにはいかない事ですが、殺された百合子といふ

のは實は中々のしたゝか者なのです。一言で云へば兄の手に負へない女でした。隨分いろんな噂のある女だつたのですが、兄はぢつと我慢して今まで暮して來たわけなのです。若し兄が慣慨の餘り妻を手にかけるのだつたらもつと〳〵前に機會はずつと早く來てゐたわけだと思ふのです。兄は家庭ではほんとにおとなしい男なんです。ですから、兄が妻以外の女と關係が全くないのは勿論ですが、假りに百合子の方に何か品行の上に落度があつたにせよ、怒つて百合子をどうかうするやうなそんな兄ではありません。此の點は十分兄の爲に辯じておく必要があると思ひます。」

「さうですか。いやよくわかりました。私も博士が家庭的に大變温和な方で、且品行の上でも全く非難のない方である事は、自分でも取調べてよく判つてゐます。此の點に關しては正直に申しますが仲井さん、私もあなたと同感です。博士が婦人關係の問題からして犯罪などを行はれる方でない事はよく知つてゐます。」

仲井の顏に初めて安心の色が浮んだ。

「御安心なさい。檢事にも警部にも、博士の人物に就いては十分話しておきますから……。」

藤枝は慰めるやうな樣子で仲井に語つたのであつた。
藤枝が相良警部に會ひに出かけるまで仲井は猶も色々と博士の事について辯解してゐた。
「では今日は之で失禮いたします。どうか、只今申上げました事はくれ〳〵もお願ひします。」
仲井はかう云つて辭して行つた。
午前九時半頃である。
藤枝は本廳へ行つて相良警部にあふ前に、事務所に寄つて、井上青年になほ調査すべき事を命じようと考へて、表でタクシーをつかまへて銀座まで走らせた。
車の中で彼は時々にやりとして一人何かうなづいてゐるやうだつたが、やがて銀座に來ると、いそいで車を乘りすて〻事務所に飛びこんだ。
ドアを開けた途端、彼は井上道夫とあやふくぶつかる所だつた。
「どうしたんだい。馬鹿にあわて〻るぢやないか。」
「先生、たつた今までこゝに楢尾警部がゐたんですが、そこで會ひませんでしたか。」
「いや會はない。そして楢尾君は僕に用があるんぢやないのか。」

「僕もさう思ひましたから、お宅へ電話をかけたのです。そしたらもうこちらへ向けてお出かけだとの事でしたので、さう申しましたのですが、今しがたまで待つてらしつてお出かけになりました。」
「變だね。今までこゝに居た、そして今出て行くなんて、をかしいぢやないか……それにしても君は今何をあわて〻外へ出ようとしてゐたんだね。」
「手紙を書いて上げたんですが、切手を貼らなかつたのでお渡ししようと思ひまして……。」
「誰に手紙を書いてやつたんだ。」
「楢尾さんがね、先生をお待ちになつてゐらつしやる間に、一寸手紙を書いてくれつておつしやるんです。」
「楢尾君がどうかしたのか。」
「え〻何でも右の人さし指を繃帶して居られましたよ。傷をなされたんださうです。それで僕に書いてくれつていふ事だつたのです。」
「さうか。君はその手紙の內容をおぼえてゐるかね。」

「簡單です。商用の手紙で、明日午後三時に下谷の何とかいふ料理屋へ來てくれといふ手紙でした。」

「へ――え、ます〳〵判らなくなつて來るね。相手は、おぼえてゐるかい。」

「市村座の役者で坂東籌十郎といふ男ですよ。」

「何、役者？」

藤枝はこゝまで聞いて、まるで判らなくなつたといふ顏をした。

「全然判らんね。一體どういふ事かね。」

ふと思ひついたやうな調子で彼は井上に云つた。

「君はまさかその手紙を僕の事務用のレターペーパーに書きはしなかつたらうな。」

「え、、稻尾さんがちやんと自分でレターペーパーをお出しになつたのです。」

藤枝はしばらく何か考へてゐたがやがて云つた。

「まあい、、ぢや僕は之から相良警部にあつて來るから、用があつたら本廳へしらせてくれたまへ。」

藤枝はかう云つてオフイスをとび出したがその時の表情は全く緊張し切つてゐた。

彼は流して來た圓タクに乘つたが身動きもしなかつた。

「不思議な事が大分起つて來たぞ。第一は仲井が何故あんな辯解をしにけさ早くから來たかと云ふ事だ。博士につゝかれてこつちの樣子を探りに來たのだらうか。それともあの男一存で來たことなのかしら……第二は今の稻尾君の話だ。一體ありや何のことだらうな。」

本廳に着くと直ぐに相良警部を訪問した。

「お待ちして居ました。あの稻尾君は。」

相良警部は藤枝が一人なのを見て不審さうにきゝ訊した。

「何だこつちへ來て居ないんですか。僕は又もうとつくに來てゐる事とばかり思つてゐましたよ……。」

「さては、先生は何か目星をつけたんだな。」

相良警部は確信あるものゝやうに云つた。

「時に黑澤はもう來てゐますか。」

「えゝ待たせてあります。私がもう一度訊いて見ますから、何でしたら傍で聞いてらしつて下さい。さうして是非智慧を貸して頂きたいですね。」

「そんなに面倒らしいんですか。」

「さあ何分一すぢ縄で行かぬ男ですからね。ではこちらにおいで下さい。」

相良警部は先に立つて或る一室に案内した。

續いて後からはひつた藤枝は、そこに腰かけてゐる男を見て、もう少しで

「成程こいつは手強さうだ。」

と叫ぶところだつた。

檢事生活數年間の間にも、かつて今こゝに羽織袴で端然と腰かけてゐる黒澤といふ男位人相の悪い人間に藤枝は未だ會つた事がなかつたからである。

二人が室内にはひつて改めて、黒澤と話をしようと座をかまへた時、一人の刑事が中にはひつて來て一葉の名刺を相良警部にさし出した。

肩ごしに見るともなく藤枝がその名刺を見ると

「大場さよ」とはつきりと印刷してある。

「しばらく待たせておいてくれ給へ。」

相良警部はかう云つて改めて黒澤の方に向きなほつた。

七

「今日はもう一度改めて種々聞く事があるから間違ひのないやうに答へて貰ひ度い。念の爲に云つておくが、お前さんに對しては可なり疑惑がかけられて居るのだからそのつもりではつきりと答へてくれないとお前さん自身に大變な不利益が來るかも知れないよ。」

相良警部がかう口を切り出したのに對して黒澤は冷笑するやうに云つた。

「何度お調べになつたつて同じ事ですよ。御承知の通り、私には詐欺横領の前科があるのですから、どうせ何を云つたつて御信用にはなりますまい。」

「馬鹿な事を云つちやいけない。前科者だからと云つて一々疑つてかゝるわけぢやないのだ。今度の簑川百合子の件についてだつて必ずしもお前さんを怪しいときめてゐるわけぢやないの

だが一應參考に聞きたいと思つてよんだのだ。」
「ぢやまあ、さう思つて承はつておきませうよ。」
相良警部はあくまで不貞くされた黑澤玄吉の云ひ方に對して、いくらかむつとしたやうだつたが、さすがに職業柄、全然耳にかけないやうすでどん〳〵用件にはひつて行つた。
「お前さんは簑川百合子とかつて結婚した事がある筈だね。」
「それも、この前申上げた通りです。今から約八年前、百合子が二十の時、大阪で結婚しました。」
「その當時お前さんの職業は？」
「今と同じ金貸業兼土地のブローカーでした。いや至つてお上から信用のない商賣でしてな。あはゝゝゝゝ。」
「百合子と別れるまでの話を簡單に述べて見給へ。」
「簡單にも何もありませんです。私はあんな女と知らずに結婚したんですが、一言で云へば我儘で虚榮心が強くて、とても手におへない女だつたのです。あちらの裁判所をお調べ下さればよく解ることですが、わたしがこの前お上へお手數をかけたといふのも、まあいはゞ百合子の爲だつたのですよ。お上でもその點をおくみとり下さいましたので、まあ、半年の懲役ですんだわけなのです。」
「表むきの離婚理由といふのは、つまりお前さんが刑務所へ行つたからといふわけだね。」
「さうです。」
こゝまで語つて來て黑澤は今までの人を馬鹿にしたやうな調子を全くすてゝ、眞面目に、さうして稍亢奮の樣子を示した。
「百合子つてやつはあんな女なんです。私がそれまでさん〳〵奴の爲に自分の金を使つたあげ句、牢にまではひつたのにその氣持も知らずに、それを理由に別れ話を持出したんです。そりやどんなわけがあつたつて、女房の爲に他人樣のお金をごまかすてえのはいゝ事ぢやありません。私が無論馬鹿ものだつたんです。しかしそれにしてもその當の女房が私に感謝しないでそれをとつこに別れようてえんですから私はほんとに怒りましたよ。」
黑澤は過去を思ひ出したやうに憤慨して語りつゞけた。

「何でも私が刑務所から出て來ると、百合子は里へ歸つちまつてゐるんです。さうしてまもなく辯護士をよこして別れ話を持つて來たんです。どうせそんな薄情な女の事とわかつて見れば、こつちにも未練はもうないのですが、いかにもこのまゝ捨てられるのは殘念なので、そこで手切と下司ばつたわけです。――何分、里のおふくろといふのが、金持なのを知つてゐますし、さき程も申した通り、私の前科だつて實は女房が金使ひの荒いところに起つてゐたりするので、むかうでも氣味が惡かつたと見え、結局二萬圓の手切をとるといふ事にきめまして、當時五千圓だけは現金で貰ひあとの一萬五千といふものは年賦で三千圓づゝ五ケ年に貰ふ事になつてゐました。」

「フム、それは百合子自身からかね。それとも倉島の家から受取る事になつてゐたのかね。」

「百合子自身からです。別れたのは同棲三年の後でしたらう。その後私はその金を資本に一時南洋の方面に事業に行つてゐましたがうまく當つて昨年まで續いたのでしたが昨年すつかり事業に失敗して內地に戻りました。百合子はもう簑川博士の夫人になつてゐますので、昨年內地に戻ると早速例の後金を催促始めたわけです。――一寸申上げておきますが、右申した手切金の件はちやんと證書になつて居りますのですから私が請求いたしても決して恐喝とか何とかいふ事になるわけはありませんのです。この點ははつきり申上げておきます。」

「何もわしはお前さんが百合子を恐喝したかどうか聞いてゐるわけではないのだ――それで、まだ一萬五千圓は全然受取つてゐないのかね。」

「いやそのうち一萬圓だけは昨年中に貰ひました。百合子本人は出來ないといふので大阪の里から何とかして貰つたやうでしたが、ともかく金は手に入つたのです。ところがお恥かしい事にこれも忽ち使つてしまつたので、本年に入つてから盛んに催促したのですが、期日が來ないといふので應じなかつたのです。」

「期日はいつかね。」

「こゝに證書がありますからお目にかけませう。」

黑澤はかういふと懷中から紙入を出して、うや〳〵しく一通の紙片を前に出した。眼鏡をかけながら、

「この通り、毎年五月二十日に支拂ふといふ事になつて居るのです。」

「ではまだ期日が來ないといふんだね。」
「それはしかし百合子のいひのがれで、實は奴はもう私には一文も拂はぬつもりだつたのです。それで私は執拗に百合子をつけまはして金の催促をしました。ところが彼女はしまひには一文も拂はぬとはつきり申すのです。私も度々かつとしまして、百合子をどうかしてやらうかと考へた事はありました。本年の二月の或る夜、博士の留守に上り込んで二時間餘りも談判しましたが、中々應じません。實際私も腹が立つて仕方がなかつたのです。」
「博士はその事を知つてゐるのかね。」
「さあそれはよく判りません。まあうす〳〵は知つてゐたでせう。しかしはつきりは知らなかつたやうです。それで私もいざとなつたら博士にまでさう云ひ出せば何とかなるだらうと考へてゐたので二月に會つた時は、百合子に『もし今までのやうな曖昧なやうすをしてゐるのならいつそ博士にぶちまけてしまふぞ』といつた事もありました。」
「本月の七日か八日頃、その事で又百合子を訪問した事があるかね。」
「あります。實は一昨日までにどうしても作らなければならぬ金がありましたので、いくらで

もよいから作つてもらふつもりで參りました。――かくしても仕方がありませんからはつきりと申上げます。」
「その時、お前さんは、
『今度いふ事を聞かなければほんとに殺してしまふぞ、後悔するな』
と百合子に云つたさうだね。」
「そんな言葉を云つたかどうか憶えませんが何分相手がヒステリーで口汚なく罵りますので、賣言葉に買言葉、私もそんな事を云つたかも知れません。」
「その意味はどういふ事かね。」
「別に深い意味はないのです。いくらでもいゝから融通しろと云ひましたのに、何とか彼とかこつてごまかしますので、私もかつとなつてどなつたのです。さうして丁度あれが殺された日が約束の日で、その日千圓でも二千圓でも作つてもらふ約束をして、出て來たのでした。」
「その日に約束通り出來なければ、百合子を殺す氣だつたのかね。」
この時、黒澤は暫く考へてゐたがやがて口を切つた。

「ほんとの事を申せば、私は百合子を八つ裂きにしてもあきたらないのです。彼女の爲にさんざん苦しみ、罪人にまでなつた私を芥のやうに捨てゝ、簑川博士のところへ行つたのですから、憎んでも憎み切れません。しかし殺せば自分も損ですから、ほんとに殺す氣はありませんでした。」

「三月十日の日の事をはつきり申立てゝ見給へ。一寸云つておくがこれは非常に重大な點だから間違ひないやうに述べるんだぜ。」

「はい、何もかもはつきり申してしまひます。十日の夜は、それまでの約束では午後七時半頃に訪問する事になつて居りました。かねて新聞紙によつて、博士がその夜、放送するといふ事になつてゐましたので、博士のゐない事は判つてゐましたが、私は夕方になつて、考へをかへたのです。

これは博士のゐる所へ飛び込んで、何もかもぶちまけた方が話が早くつくかも知れない。

さうだ。さうしよう。

かう思ひまして急に急いで出かけたのでした。

博士は七時二十五分から放送するといふ事でしたから七時十分位前に行けば家にまだゐるに違ひないと思つて、急いでタクシーに乘つて行つたのです。ところがついて見ますと、博士は居らず、百合子一人だけしか居りませんでした。」

「一寸待つて。」

相良警部はこの時ちらと傍の藤枝に目くばせをしながら、黑澤玄吉の供述をさへ切つた。

「この所は重大な點だ。——お前さんが向うに着いたのは何時頃だつたかね。」

「時計をはつきり見ませんでしたが、家をタクシーで出たのが七時十五分位前でしたから、十五分として七時か七時五分位過ぎてゐたでせう。」

「これは參考のために云ふのだが、簑川百合子はその時分には、もう死體となつてゐた筈なんだ。」

「何、何ですつて？」

黑澤は意外な事を聞くといふやうな表情をした。

「いや、簑川百合子は十日の午後七時頃にはもうこの世にはゐなかつた筈なのだが。その事は

死體の解剖の結果からもよく判つてゐる。だから、もしお前さんがその時生きてゐる百合子を見たとすれば、それは嘘か思ひ違ひだ。」

「冗談ぢやありませんよ。私はまだ夕方幽靈を見る程老耄れてはゐないつもりです。たしかにその時出て來たのは百合子です。現に私は一、二分間百合子と話をしましたからね。」

「それ、又そんなくだらぬ嘘をつく。もう一度はつきり云ふが、今の點は非常に重大なところなのだ。お前さんの答如何によつては殺人の嫌疑をうけるかも知れないのだぜ。」

「いや何とおつしやつてもその時百合子がゐた事はたしかです。」

「そりや嘘か思ひ違ひだ。」

「いえ、嘘でも、思ひ違ひでもありません。」

黑澤はこゝまで語つて、再び初めのやうな冷笑を浮べて默つてしまつた。

相良警部は相良警部でひどく不機嫌になつてしまつた。肝心のところで黑澤が嘘をついてゐるので、ぢり〳〵として來たのであつた。

藤枝が警部の諒解を得て口を入れた。

「黑澤さん、十日の午後七時頃に百合子が未だ生きてゐたといふ事は非常に重大な事なんですが、一寸信用が出來ないのです。」

「信用出來なければなさらぬがよろしい。私はたゞ……」

「怒つちやいけない。私はたゞかう申したいのだ。如何でせう黑澤さん、あなた以外にその時百合子が生きてゐたといふ事を見た人はないでせうか。百合子が玄關の戸を開けたとすれば、たとへば自動車の運轉手とか何とかゞ……」

黑澤はこの時、はたと膝を打つた。

「さうでした。さうでした。その日さきにも申した通り急に時間を急いだので、私はいつも乘りつけの家の附近の大和タクシーといふのに乘つて行つたのです。ですからそこの運轉手は或は私が呼リンを押してゐる間、まだ外にゐて百合子を見たかも知れません。」

「大和タクシー？　運轉手の名は？」

相良警部は急いでペンをとつて紙に書きつけた。

「大和タクシーの主人で望月といふ男です。この男をお呼びになれば多分判りませうよ。」

「百合子の生死の問題は、では望月をしらべる事として、お前さんはそこで百合子とどんな話をしたかね。」

相良警部がたゝみかけて聞いた。

「會つてからは實に簡單でした。私が自分の方の用件を切り出しますと、百合子はかういふのです。

五百圓だけはこゝにあるから之で一時我慢してくれないか、といふのでした。私も五百圓位ではそのまゝ歸る氣がなかつたのですが丁度その時來客らしく、玄關のベルが鳴つたので私もあつさりとすぐにそこを引あげました。」

「應接室で話したのか。」

「さうです。」

「茶など出されたかね。」

「いや、お茶も何も出されるものですか。第一、話をする間もなかつたのです。上つてから二分か三分で私は金をもらつて出たのでした。」

藤枝がこの時、口を出した。

「玄關の處で、來客に會つたでせうね。」

「人がゐたやうです。しかし暗い上にその男は襟卷で顏をうづめてその上、なぜか私の方に後を向けて遠くに立つてゐたのではつきり顏を見ませんでした。私もなるべくあそこで人に顏を見られたくなかつたので、直ぐ、外に飛び出してしまつたわけです。」

「君は五百圓受取つた時、受取は書いたらうね」と藤枝が聞く。

「無論書きました。百合子が確かに帶の間にはさんで居た所を見ました。」

「後から來た客に百合子が玄關で何を云つたか全然憶えがありませんか。」

「さあ、今申した通りですから、全然記憶がありませんね。」

此處で一應取調べが終つたわけだつた。

相良警部は藤枝を見て何か之以上聞く事はないか、といふやうな樣子をしたが藤枝は何も云はなかつた。

「ではもう大抵いゝんだが、別の室で一寸待つてゐてくれ給へ。」

相良警部がベルを押すと刑事が一人這入つて來て、黑澤を案内して室外に出て行つた。

二人とも後で顔を見合せてほつとした形である。

「藤枝さん、どうです。黑澤の供述は？　黑澤も妙な嘘を云つてるでせう。まるで博士の供述と合せるやうに云つてゐるぢやありませんか。」

「百合子が七時頃まで生きてゐた、と主張するものが博士以外に一人殖えたわけですね。で、黑澤の始末はどうします。」

「矢張りそつとこのまゝほつて樣子を見るつもりです。大場さよを呼んでありますから、後で一應調べますが、矢張りあなたの戰法通り、相手を警戒させぬやう、黑澤も安心さして歸すつもりです。」

この時刑事が突然這入つて來て、

「只今の黑澤がもう一度警部殿にお目にかゝりたいさうであります。」

と云つた。

「此處へつれて來給へ。」

間もなく黑澤が又現れた。そして口早に云つた。

「あの今思ひ出しましたのですが、あの日私は博士邸に茶色の襟卷を忘れて來たのですが見當らなかつたでせうか。」

八

「茶色の襟卷？」

相良警部は不審さうに藤枝の顔をながめた。

「そんなものはなかつたやうだね。少くも、私は襟卷の事について聞くのは今が初めてなのだが。」

藤枝はかういひながら黑澤の方を見た。

「ございませんでしたか。では他處へ忘れたかな――しかし私はその襟卷があの簑川の家で發見されたので、私があの日あそこに行つた事がお上へ知れたことゝばかり考へて居りましたよ。では、あちらでお待ちします。」

黒澤はかういつて室外に去つた。

しばらくして、大場さよ子が呼び入れられた。

一見、良家のお嬢さんと云つたやうな感じの美しい女である。假りに博士がこの女と懇意になつて、妻を疎じたとしても、決して人は不思議には思はないだらう。

「もう一度先日の事について聞きます。今黒澤玄吉を此處で調べたのですがね、大體あなたが先日云つたやうな事を認めて居ますよ。たゞ夫人に金を請求したのは決して恐喝ではなく、正當な權利だといふ主張です。」

相良警部はかういつて、それから黒澤玄吉の供述の大體を大場さよの前で一應話した。

「大體こんな事をいつてゐるのですが、あなたが知つてゐる範圍もこんなものですか。」

「はあ、たゞ私は、私がお暇をとります丁度其の日、黒澤さんが、奥さんに對して、本當に殺してしまふ、と云つて居られるのを確かに聞いたのでございます。」

「成る程……序に聞きますがあなたは三月十日卽ち博士邸に事件が起つた時は浦部子爵の家に居られたとの事ですね。」

「はあ、麴町區の浦部子爵の御邸に九日から參つて居りました。」

「博士夫人が死んだ事を何時知りましたか。」

「翌日新聞紙で讀みまして驚いたわけでございます。本當にあんな優しい奥樣が人手にお掛りになるなんて、全く想像もつかない話でございますわ。」

大場さよはかう云つて如何にも感慨に堪へないといふ樣子をした。

この時、藤枝が不意に妙な質問をした。

「大場さん、黒澤といふ男はそれまで度々簑川家へ出入したんでせうね。」

「はあ。」

「近頃ではどんな襟卷をして居ましたか。」

此の妙な質問にはさよ子も聊か面喰らつた形だつた。

「よく憶えませんですが、黒かつたやうに思ひますが……」

「あ、さうですか……では茶色の襟卷ではありませんね。」

「え？　茶色の襟卷？」

大場さよ子はこの時何故か妙な表情をしたが、一瞬、直ぐ又もとの平靜さにもどつた。

「では歸つてもよろしい。」

相良警部が云つた。

大場の去るのを見ながら、ベルを押して、刑事を呼んだ。

「黑澤にももう歸るやうに云つてくれ給へ。今日はあれ以上調べても何もならんから。」

給仕がこの時始めて茶を入れて二人の前にもつと出て來た。

「どうか。」

相良警部は藤枝にすゝめながら自分もぐつと一杯茶を呑み込んだ。

「如何です。御感想は？」

「うん、黑澤といふ人物も相當な人間ですな。しかし云ふ事が割に本當らしい。百合子を八つ裂きにしても飽き足りないなどゝはつきり云ふあたりは面白いですよ。」

「大抵の者ならあゝは惡くは云はない。まかり間違へば自分の方に殺人の嫌疑が掛けられやうといふ際に、あゝはつきり云ふのは中々大したものですね。」

「考へ方によればあれが却つて手なのかも知れないな。あの位の人間になると、なまじ變に隱し立をする事は危險だといふ事を十分知つてゐると見える。」

「ところで藤枝さんどうです。百合子が夜七時頃ちやんと生きて居て黑澤に會つたといふ件は。」

「さあ、僕も一寸あの點ははつきり判りかねるが。」

「一方に數時間前に死亡したといふ醫學的證明がある。さうして一方午後七時過ぎまで百合子が生きてゐたといふ人間が二人ある。」

「無論原則として我々は斯かる場合に、科學的證明を信じなければならんでせう。卽ち簑川博士のいふ事と、黑澤玄吉のいふ事は信ずべからず、といふ事になる。」

「さうすると、博士と黑澤が何故あゝいふ事をいふのだらうか。」

相良警部は一寸困つたやうな顏をしながら藤枝の顏を見た。

「極端に考へれば、博士と黑澤が二人何時か會つて相談したのだとも見られぬ事はない。二人の供述が矛盾しないやうに豫め考へてゐたとも云へるかも知れない。いや事によると、何か他

に原因があつて二人で百合子をどうかしたと考へられぬこともないでせう。藤枝さん、如何お思ひになります。」

相良警部は藤枝が默つたまゝなので、もどかしさうに問ひかけた。

「ねえ、相良さん、さつき黒澤が望月といふ自動車の運轉手の事を云つたでせう。あれは勿論出鱈目だとは思ひますけれども、一應調べる必要はないかしら。」

「私は全く無駄だと思ふ。望月といふ男がゐたにしろ、そんな事は覺えてはゐないだらう。それに、黒澤の乘りつけの車だとすれば、黒澤に智慧をつけられて何とでも證言をつくつて來ますからね。」

「まあ、さう云へばそんなものだが……」

藤枝は、一寸話の腰を折られたやうに默つてしまつた。

「大場さよ子の方ですが、あの方は如何です、全く信用していゝですかね。」

「さあ。」

藤枝が急に不愛想に答へた。明かに彼は何か心の中で考へてゐる事があるらしい。

「さう〳〵、僕はまだ急用があるんだつた。」

彼は不意に立上つた。さうして驚く警部の方を見ながら

「又來ますよ。一寸今日は忙しいので失禮します。」

相良警部も藤枝のかういふ性質をよく知つてゐるので強ひては止めようとはしないけれども多小面喰つてゐるやうすで。

「さうですか。ぢやあ。」

と立上つた。

「さうだ。一言君に云つて置かなきやならない事がある。あの大場さよ子ね。あれが十日の夕方浦部子爵家にゐたといふ事は僕も調べたから確かなんだ。併し、相良君、大場はあの日、七時頃に風呂に行くと云つて二十分ばかり子爵家を出た事實を君は知つてゐるかね。」

「いゝや。」

「僕は子爵家の女中を一人買收して聞き出して見たのだが、何しろその間だけは確かに浦部家にはゐなかつたんだ。浦部家も麴町區にあるしタクシーといふ剽輕者のある時代だから、二十

分といふ時間には可なりいろんな事が出來るわけだぜ。この點をはつきり考へて置く必要はないかしら。」

「いや有難う。所で大場は一歩も外に出なかつたと云つてゐるよ。」

「君に外出を突込まれゝば、屹度、忘れてゐたといつていひ直すに違ひない。ところで彼女が本當に風呂に行つたかどうかを調べるには極く都合のいゝ事がある。僕は調べて見たんだが、浦部家の女中はあの附近の柳湯といふ湯屋へ行く筈なのだ。丁度彼女が風呂に行つてゐる頃、あの夜あの附近一帶に停電があつたんだ。風呂の中で不意に電氣に消えられちやあ、一寸困るだらうから、苟くも風呂にほんとに行つてたとすれば、停電の件は忘れる筈はない。其處を聞いて見給へ――一體今日の君の取調を聞いてゐると僕は黒澤よりも、大場の方を疑ひ度くなるね。大場のいふ事はどうも可笑しいよ。例へば百合子の事をあんな優しい方が、などゝわざとほめたり、少しも外へ出なかつたなんかといふのは僕は氣持ちが惡いね。」

「さう、僕もさう思はぬ事はない。」

相良警部が相槌を打つた。

「氣持ちが惡いといへばもう一つ妙な事がある。相良君、君は氣がついたらうが、僕がほらあの黒澤の云つた茶色の襟卷といふやつね、あれを云つた時の大場さよの顏色さ。」

「さう、僕もあれは變に感じたんだが……」

「茶色の襟卷といふ一言を云つたら、大場さよ子が何とも云へない變な顏をしたらう。あれは一體何を意味するのだらう……。この謎を解く事が一つの仕事さね。いや御邪魔をした。」

かういふと、藤枝眞太郎は、まだ相良警部が何か云はうとするのに構はず、さつさと出て行つてしまつた。

丁度、相良警部が、黒澤玄吉、大場さよを調べてゐると同じ頃だつた。即ち三月十二日の晝前、簑川博士の邸では、應接間で稲尾警部と仲井長太郎が何かひそ〳〵と話をしてゐた。

「今申した通りの次第ですから、仲井さん、あなたから一つ博士を說得してもらひたいものですがね。無論我々は、被疑者なり、參考人を取調べるのが商賣なんだから、直接調べてもいゝんだが、兎も角相當の地位ある方でもあり、餘り酷くいぢめたくはないのです。親戚の誼みで、あなたからでも、よく利害をといて話したら、博士も本當の處を饒舌る氣になられるだらうと

思ふのですけれど……如何ですか。」

「いやよく判りました。全く仰しやる通りこのまゝ簑川が默つたまゝでゐますとます〳〵彼に對する疑惑は深まるばかりですから、少しも早く眞實を述べさせたいと私も思つてゐるのですが……」

「あなたから十分云つて下さつたらいゝでせう。私の考へでは、博士は必ず犯人を知つてゐる、若くは犯人らしいと思ふ者を知つてゐるに相違ないのです。では私は一寸失禮しますが、又後で來ますからそれまでに博士を十分説得して下さい。それから一言博士に警告して置いて下さい。假令動機が何であらうとも、苟くも犯人と目せられたものゝ爲に證據物などを隱すといふ事は明かに刑法上の責任を逃れぬものだといふ事、之をはつきり云つておいて下さい。度度お話した通り、何で縊り殺したかその物が見えぬといふのは實に奇怪千萬です。之は博士以外に隱す人はない筈なんですからね。」

楢尾警部はかう云つて、博士邸を辭し去つたのであつた。

其の午後二時頃、楢尾警部の姿は再び藤枝眞太郎の事務所に現れた。

「やあ、今朝君一寸寄つたさうだね。何だか變な手紙を井上に書かしさうだが、可笑しいぢやないか。一體どうしたんだい。」——

「いや、一寸考へた事があつたもんだからな。時に、井上君は、今は留守ですか。」

「あゝ、用事があつて使に出した。今僕一人だよ。何か新しい事でもあつたかね。さう〳〵、僕は今朝、本廳に行つて、相良君の取調振を見て來たが、中々彼やるね。」

「黑澤玄吉を調べたのかな。」

「さう、その外に大場さよといふ女も調べてゐた。いや中々二人ともガツチリしてゐるよ。こと に、美しい若い女といふものが如何に巧みに平氣で嘘をいふかといふ事を、今更見せつけられて來たよ。」

「それで、相良警部の見込んでる所は？」

「さあ、先生もわれ〳〵同樣、中々意見をいはない男だからどこを狙つてゐるのか一寸判らないね。しかし博士、黑澤、大場、この三人を狙つてゐる事は確かだね。君も何か探し當てたらしいが不相變意見は云はずかい？」

「所が今日はそれをはつきり云ひに來たんですよ。特にその爲に此處に來たわけなのです。」
「といふと、いよ〳〵犯人の目星はついたんですな。」
藤枝は乘り氣になつて聞きはじめた。
「さう、少くも怪しむに足るべき人物を見つけたのです。博士もその人物の怪しいことを知つてゐるらしい。いや知つてゐるからこそあんな曖昧な態度を取つてゐるのではないかと思ふ。」
「僕には一寸話が判らないが。……つまり博士は犯人を知つてゐるが、何らかの理由でかばつてゐるといふのですか。」
「まあつまりさうです。」
「これは面白い。そしてその理由は。」
「二つの理由からですよ。一つには家庭の名譽を重んずるといふ點、一つには犯人をすぐにあげるのは工合がわるいといふ點。」
「ほう、始めの方はよく判るが後の理由が僕には一寸判らんね。何か犯人と博士とは、親しいのですか。」

「いや、さうとは限らんのです。――さうですね、何と云つていゝか、――さあ假りに博士が、相良警部なり又は藤枝さんあなたなりを疑つたとして、すぐわれ〳〵にいふでせうか。」
「おや、君は又變な事を云ふぢやないか。まさか君はこの藤枝眞太郎を疑つてるわけぢやないだらうね。」
「勿論ですよ。」
稲尾警部は大きく笑ひながら云つた。
「そりや一つの例ですよ。相良警部を疑つてるわけでもないのです。たゞ博士は、あなたの餘りよく知つてゐる人を疑つてゐるから隱してゐるのです。」
「何、僕の知つてゐる人? これは驚いた、一體そりや誰の事だい君。」
藤枝がせき込んで聞く。
稲尾警部は一向騷ぐ樣子もなく續けた。
「ねえ藤枝さん、十日の夜、博士邸に行つた男があるのですよ。」
「そりや判つてゐる。黑澤玄吉さ。」

「黒澤？」
今度は楢尾警部が驚いて云つた。
「黒澤が行つたとは、相良君からも聞いたが相良君もあなたもそれを信じてゐるのですか。あの夕、博士邸に行つたのはもつと若い男ですよ。もつとロマンティツクな用で夫人に會見に行つた男があるのです。藤枝さん、あなたは本當にそれを知らないんですか。」
楢尾警部はずるさうな顔をして云つた。
「知らないさ。一體それは誰の事なのです？」
「而もその男が博士邸にのつぴきならぬ證據品を忘れて行つたのです。」

九

「楢尾さん、犯人が何か落して行つたんだつて？」
「さう、少くも何者かゞ、夫人の生きてゐるうちに、博士邸に行き、夫人の直ぐ傍にゐた事は明かです。」

「で、それが、黒澤以外の者だといふんですね。君は。」
「黒澤があそこに行つたといふのは、彼自身の自白以外には何も證據はないと思ひます。從つて、私はその自白には大して重きを置かんですよ。」
楢尾警部はいやに落付いてしまつて、中々問題にふれて來なかつた。かうした場合、相手をぢらしておくのがこの人のくせだつた、いや、楢尾警部ばかりではない、藤枝眞太郎自身だつて、自分だけが知つてゐると信じた事は中々口には出さないのだ。だから藤枝自身にも、楢尾警部が相手を可なりぢらさうとしてゐる事がよく判つてゐた。
こんな時に、意地を張つて少しも驚かない樣子をするよりも、寧ろ楢尾警部の考へ通り十分ぢらされた振りをした方が早く結末に達すると見たので藤枝はことさら急きこんでたづねた。
「ぢあ、改めて聞くが、その時その場にゐた奴といふのは一體誰ですね、君はまだそれをはつきり云はないが……。」
待つてました、といふやうな樣子で、しかし楢尾警部は直ぐにその問ひに答へやうともせず、おもむろに懷中から一通の西洋封筒を取り出したのであつた。

「藤枝さん、實はね、一昨日現場で私はこれを拾つたのですよ、而も百合子夫人の死體の下からね。」

「死體の下？」

「さうです。死體を動かしたらその下からこれが出て來たのです。この點は大切な所ですよ、若し博士の供述通り、誰も夫人の死體を動かした者がないとすればですね、われ〳〵はこの手紙が自分で夫人の死體の下に入つて行つたと考へるか、或ひは夫人がこの手紙の上に倒れて死んだと考へるか、又は、誰かゞ、夫人の死體の下へこの手紙を突込んだとするか。この三つの考へ方しか出來ないわけです。この中で第一と第三の考へ方は、不可能又はありさうもない事です。とすると、夫人はこの手紙の置いてあつた所へ、倒れたといふ事になる。いひかへれば夫人の生きてゐるうちに、あの室の絨氈の上にこの手紙が落ちてゐたとしなければなりません。ところでこの手紙には切手がはつてない、だから郵送されたと考へるわけには行かない。兎も角誰かゞそこに持つて行つたとしなければならんです。」

「君の考へ方にはいち〳〵賛成だが兎も角その手紙を拝見しませう。」

洋封筒の表には、鉛筆の走り書で、

「麴町區富士見町」と番地を記し、更に

簑川百合子様

と記されてあつた。發信者の名は書いてない。

「これがその内容ですよ。」

栢尾警部はさういひながら、一片の紙切を藤枝の前にさし出した、内容も鉛筆の走り書で、次のやうな事が記されてゐる。

先日はいろ〳〵御馳走樣になりました。厚く御禮申上ます。至急御目に掛かつてお話したい事が出來ました、S子に關してゞす。

此の手紙つき次第御電話を下さいまし。事務所でない方がいゝのです。あしたは家に居るつもりですから、このあひだ申上た所へかけて、呼出して下さい。その時は山田とか小林とかいふいゝ加減な名を用ひて下さいまし。

右急ぎ取敢ず用件まで。

十日
百合子様

「ほゝう、この手紙は中々、いろ〳〵な事實を暗示してゐますね、――成る程、――して見ると、夫人にはやつぱりひそかに懇意にしてゐた人がゐたと見える。」
「さうですよ、確かに。」
楢尾警部が得意さうに云つた。
「かういふ事實から考へて行くと、博士のあの不思議な供述が説明されるわけです。つまり博士は、夫人が祕密の友人をもつてゐた事を出來るだけ隱したいのだ、況んやその男に夫人が殺された事などは出來るだけ祕密にしておきたかつたのでせうね。」
「楢尾さん、で、君はこの手紙を夫人が既に讀んだと思ふかね。」
「さあ、そこですよ。私はどうも夫人が讀んだとは思はないですね。」
「おや、それぢや君は、自分で封筒を開けたのかい。」

「藤枝さん、あなたも知つての通り私は如何なる場合でも出來るだけ合法的な手段をとる事にしてゐます。信書をむやみに開けたりなんかはしませんよ。」
「では一體誰が封筒を開けたのです。」
藤枝が聞いた。
「開けるも開けないもないのです。ほら、御覽の通り、この手紙は始めから封じてはありませんよ。」
楢尾警部が改めて封筒を藤枝に示した。成程、糊は完全に殘つてゐて、はりつけたあとはない。
「ほう、之はます〳〵妙だ。」
藤枝は何か考へるやうに、目をつぶつた。
「此の手紙が死體の下にあつたといふ點、及び全然封じてなかつたといふ點から、私はこの手紙を書いた男があの時夫人の側にゐたのだと考へるのです。同時にその人物を第一に怪しいと思ふのです。」

「とおつしやるのは。」

「これは無論、死體を誰も動かさなかつた、といふ假定のもとに出發しなければならんのですが、死體の下にこの手紙があつた、といふ事は、夫人が生きてゐるうちに、あそこに之が落ちてゐて、その上へ夫人が倒れたといふ事を意味します。而も十日の午後七時前までは決してあそこにはこんなものはなかつた筈です。何故ならば、死體のあつたところは博士の書齋ですから、夫人の室なら兎も角博士が出かけるまでにこんなものが博士の室の絨氈の上に落ちてゐたとは思へない。博士にせよ、夫人にせよ、之をそこで見つければ何とかするに違ひありませんからね。さうすれば、結局博士が放送局へ出かけた後、いひかへれば夫人がたつた一人になつてから、即ち午後七時以後にこの手紙があそこに落ちたとしなければならんです。」

「では稲尾さん、君は、博士の云ふ通り午後七時までは夫人は生きてゐたと考へるのですか。」

「いや必ずしもさうではないのです。例の死體の強直から考へると之は可なり怪しい、それにしても私の考へてゐるテオリーはたゞ時間だけの點が變つて來るだけです。もし午後一時頃に殺されたとすれば、その死の直前に、この手紙がやはりあそこにあつたと考へなければならな

い。」

「さう、博士を疑はない限りは、さうでせう。たゞ、この手紙を、博士が何處からか持つて來たのでないとすればね。」

「だから、私はさつき云つたでせう、博士の供述を一應信ずるとするのですよ。博士が犯人であるといふ考へでなく、たゞ博士が時間の點だけを誤魔化してゐるとするのですよ。」

「それにしてもこの手紙を書いた人間自身が、果して博士邸に行つたかどうかははつきりしませんからね。」

「藤枝さん、あなたにも似合はないぢやありませんか、この手紙を書いた人間が自身であそこに行つた證據が十分ある、この手紙が封じてないといふ事です、これが何よりの證據ぢやありませんか。」

稲尾警部はます〳〵得意になつて、饒舌り續けた。

「若しこれが一旦封をされてゐたのに開けられてあつたのなら一應受信者たる百合子夫人が開けたものだと推察すべきでせう、しかしこれは始めから開けられてあつた、而も内容は御覽の

通り極めて祕密を重んずべきデリケートなものです。この發信者はこれを開けたまゝ他の人に傳達を賴むでせうか。――そんなことはあり得ないではないですか。」

「では君は本人自身がこれを持參したといふのですか。」

「さうです。」

「それは一寸可笑しいな、本人が自分で來てゐるのに何を好んでか手紙を書いて置く必要があるでせう。又もし夫人が留守だつたとすれば、この手紙は、置いて歸るべき性質のものではない。」

「私は不思議ではないと思ひますね。かう考へる事は不自然でせうか。この手紙の筆者が、まづ、郵便で出す事を考へた。それで急いで鉛筆で走り書をする。さうした後、用件が非常に切迫した。それで、急いで自分でやつて來た、手紙をポケットか何かに入れたまゝで來たのです、それを何かの拍子で落としたといふ考へ、これは不自然でせうか。」

「そりやない事はないでせう。」

「もし博士の供述を信ずるとすれば、この手紙を書いた男は、丁度夜七時二十分頃から博士が

留守なのを知つてゐる筈です。それで思ひ出して手紙を出さずに自身で來た、と考へる事も出來ます。」

「では一體この人間は誰だといふのですか。」

楢尾警部は何故か、にや〳〵としながらポケットから又一つの封筒を取り出した。

「この中にかういふ手紙がありますが、讀んで御覽なさい。」

藤枝は默つてそれを受取つたが、それは極めて薄い紙に鉛筆で書かれた文章だつた。

「拜啓、至急御目にかゝり御話したき用件あり、明日下谷區仲町の川又まで御枉駕被下度候。河合氏も見えらるゝ筈に有之候

例の件百圓以下にてはむづかしき由。いづれ拜眉の上。草々。

楢尾

坂東簑十郎樣

「何、坂東簑十郎？」

「藤枝さん、この筆者が誰だか判りますか。そこでさきの手紙とこの手紙とを比べて御覽なさ

い。今度の手紙の中に簑川百合といふ四字がちやんと入つてゐる筈です。その他、同じく『至急御目にかゝり度し』といふ言葉もあります。所が之は全く同じ人の字ですよ。私はさつき役所でいつも頼む鑑定家に見てもらつて來たのですが、その人の云ふのにも正しく同一人の筆蹟ださうです、われ〳〵が一寸見たゞけでも、同一人の筆だといふことは直ぐ判りますよ、ことに簑川の簑といふ字と坂東簑十郎の簑といふ字なぞは全く同じ人の書いたものである事、一見して明かです。」

「君はさつき井上道夫にこれを書かせたんだね……ぢやあ君は井上を疑つてるんですね。」

藤枝は今更驚いたやうに楢尾警部をながめた。

「藤枝さん、博士が何故あんな事を云つてるかこれで判つたでせう。はつきり云ひます、博士は貴方の所の書生を疑つてゐるのです。だからそれとは云ひ兼ねてゐるわけです。さうして、まことに殘念ながら、藤枝さん、私も井上道夫を疑はないわけにはいきません。」

「しかし……しかし、井上に限つてそんな事が……。」

「貴方はかつてある事件を私と一所にやつた時、誰に限つて、なんて云ふ言葉は犯罪捜査には

禁物だと自身で云はれたではありませんか。」

「それはさうかも知れない……。」

「ねえ、藤枝さん、貴方の過去の經歴と今の位置が貴方を疑はせないですよ。貴方が世話をしてゐる青年に嫌疑がかゝつてゐる以上、貴方が一應變に思はれても仕方がない筈です。名探偵の助手實は犯人！　一寸面白いぢやありませんか。」

勝ち誇つた調子で楢尾警部はこゝで一寸息を吐いた。

「いや一言もない。……然しそれにしても君はどうして井上を博士邸の犯人と考へる事が出來たのですか。」

「私は夫人の死體を見、この手紙を見、更に博士の怪しい供述を聞いてからこれは、何か、夫人の戀愛事件が原因ぢやないか、と考へたのです。貴方も同じお考へらしいが博士は確かに犯人を知つてゐるらしい、しかし云ひ悪いのだ、とすればどうしても夫人の名譽に關する話としか思へないぢやありませんか、それで私は、昨日一日あらゆる手段をつくして夫人の品行を調べ上げたのでした。世間の噂通り可なり大ぴらに男と出歩く人だから、調査は割に簡單でし

た。ところで最近夫人と音樂會や銀座なんかに行く男がある事が判つたのです。それが卽ち貴方の所の井上青年なのです。一體貴方はあの男の品行や性質を調べたことがありますか。」

「何うも甚だ恐縮ですね。實は詳しい事は何も知らんですよ、あの青年はもと私の友人のある辯護士の所に書生をしてゐたんですが、何でも探偵になりたいのだといふので、近頃私の所に來るやうになつたのです。至つてまぢめな男だし、仕事もするから信用して居たんですが――それが夫人と懇意とは、案外です。」

嘆ずるやうに藤枝が云つた。

「矢張り貴方のやうな名探偵でも、自分の家の者は疑はないと見えますね。所謂飼犬に手を咬まれたといふ奴ですな。」

「私の家にでも居るのだと品行ももつとよく判るのだけれど、あの男は事務所に來るだけで、寢起きは、郊外の自分の家でするのです。父母も健在で、父は飲食店をしてゐるさうです。……いや實に驚いた。」

「しかし夫人とどの程度まで懇意だつたかはよく判りません。が、兎も角かうした手紙を書く

間柄ではあるのです。それにあれは眞面目な事は確かです。けれども、眞面目だけに戀をすると危險ですよ。その結果人を殺したりする事のあるのは貴方もよく御承知の通りです。」

「決して辯解する譯ぢやないが、それにしても、井上があの日博士の家に行つたとは何うしても思へない。そりや手紙は確かに書いたでせうがね。」

「ところがのつぴきならぬ事があるのです。貴方はあの時、判事と檢事が指紋の研究をしてゐた事を覺えていらつしやるでせう、あの日、書齋の博士のニヌ塗りの大きな机の上に、新しい右の食指と中指の指紋があつた。あれだけが誰のか判らなかつたのです。ところで、井上に書いて貰つたこの手紙ですが、この用紙は極く薄いのですぐ指紋がとれるやうになつてゐるのです。先刻井上道夫に書かせた時、同時に彼の右の指の指紋をとつてしまつたのです。遺憾ながら同一指紋です。」

斯う言ひながら楢尾警部は、机の上にあつた指紋の寫眞と、手紙の指紋の寫眞を出して並べて見せた。機敏な警部は一寸の間に、もうこんな仕事をしてしまつてゐたのだ。

ぢつとそれを見てゐた藤枝は、やがて、

「さうですか。なるほど……。」
と諦めたやうに呟いたのである。

一〇

氣まずい靜けさが、暫く部屋の中に漂つた。今まで雄辯を振つて來た楢尾警部も相手の何とも云ひやうのない困つた樣子を見ては、さすがに一寸默らないわけにはいかなかつた。それほど、藤枝眞太郎は弱り切つてゐたのであつた。

實際、此の時位彼が困惑の表情をはつきりと示した事はなかつた。今までどんな難件にぶつかつても、必ず卽座に頭を働かせて周圍の者共を驚かす彼だつた。名探偵の名を一度だつて恥かしめた事のない藤枝だつた。その彼は今眞實の事を云へば、今までかつて出會つた事のない難局に立つてゐるのである。

楢尾警部の前でこそ餘り辯解はしては居ないけれども、井上道夫といふ青年を、彼は非常に信賴し、且つ愛してゐるのだ。その眞面目さ、その誠實さ、及びその聰明さを、短時日の間に

早くも見拔いた彼は、弟のやうに思つて井上を敎育してゐるのだ。ゆく〳〵は第二の藤枝としてこの探偵事務所を渡したい。讓り渡せるやうな立派な男にしたい、と希望してゐるのである。

その信賴してゐる井上青年を、この警察官は疑つてゐる！　而も義川博士夫人に對する殺人の嫌疑をかけてゐるではないか！

不可能だ、絕對に不可能だ、あの男に限つてそんな馬鹿な事が有り得る筈はない。

彼はかう云つて笑はうとした。しかし笑へなかつた。

一歩退いて靜かに考へて見る。……井上道夫に對する彼の信賴と親切との情が、名探偵としての彼の理性を暗ましてゐるのではないか！

第三者として頭を働かせる時は、神の如き智慧を出す藤枝も、全く楢尾警部のいふ通り自分の弟子の事となると、急に理智の働きの鈍くなるのを感じないわけにはいかないのである。

現に彼は、井上が夫人とあんなに密かに懇意になつてゐる事を知らなかつたではないか。

「井上だつて若いのだ、戀もするだらう。不思議はない。又したつてかまはないぢやないか。それが犯罪と何う關係があるのだ。」

彼は強ひて心の中でさう思つて見たりした。
楢尾警部は、手持ちぶさたさうに、二つの手紙をかはる〴〵開いて改めて讀んだり下に置いたりしてゐた。
この時、藤枝の頭の中に電光のやうに閃めいたものがあつた。
それは昨日、この事務所で、初めて井上に事件を知らせ、調査をさせた時に井上が云つた言葉だつた。
「何うも死體に不思議な所があるのだよ。」
と藤枝が云つた時、井上青年がいきなり、
「ではもつとずつと早くにでも殺されたんでせうか。」
と云つたあの一言だつた。
今から考へると妙な質問である。
死體の樣子が變だと聞かされた井上が、直ぐに、死體の强直を知つてゐるやうな質問をした事である。確かに藤枝は、死體の强直を井上には云はなかつた筈だ。

では彼は何うしてそれを知つてゐたか。
背中から冷水を浴せられたやうな感じがして藤枝は密かに身慄ひをした。
「楢尾さん、君の云はれる事に對してはさしあたり何も反對すべき事はありません。井上道夫の事についても私は輕卒に辯護すべきでもないと思ひます。仕方がありません。彼を殺人嫌疑者として取調べて下さい。」
彼はかう云つて、煙草に火をつけた。
楢尾警部は仔細に藤枝の樣子に注意してゐたがこの時慰めるやうな調子で、改めて口を切つた。
「私が井上を取調べる位ならもう既に捕まへてゐますよ。藤枝さん、私は貴方の今までの功績をよく知つてゐます。貴方の力で我々がどれ位救けを受けたかもよく知つてゐます。一言で云へば、私は貴方を絶對に信じてゐます。何うでせう、あなた自身で井上を調べて下さらぬでせうか。そりや私が井上を引張つて來て調べるのはわけはありません。しかし、貴方のあれは弟子です。貴方の助手です。その男を私が殺人被疑者として取調べることは一寸遠慮したいので

す。又井上だつて同じ事なら貴方にいぢめられる方がいゝでせう。私は貴方を絶對に信じます。貴方が彼を逃したり何かさせぬ事を信じます。何うか貴方自身で取調べて下さい。さうして今夜にでも自首させて頂きたいのです。之が私が貴方に今示し得るせめてもの好意ですよ。」

「さうですか。有難う。では私から早速尋ねて見る事にしませう。もうまもなく歸つて來ると思ひますから……。」

「私は實は博士の方もまだ直接に當つて見ないのですよ。仲井から聞かしてあるのです。之からもう一度博士邸に行つて、博士の答辯を聞かなければならないのです。」

楢尾警部はかう云つて立上つた。

「では何れ又。」

藤枝は力なく扉を開けて楢尾警部の出て行くのを見送つたのであつた。

楢尾警部は其の足で直ぐに博士邸に戻つて來た。

「楢尾さん、御待ちして居ました。簑川は少々氣分が惡いといつてベッドに入つてゐますが、お話の趣きをあれから十分傳へたのです。まだはつきりした事は聞きませんが貴方からもう一

度はつきり利害が說いて云つて下さればきつと何か新しい事を云ふに違ひありませんよ。」

仲井が待ちうけて警部に囁いた。

「さうですか、では失禮してベッドの所に御案内を願ひますかな。」

仲井は警部を博士のベッドの所に案内して自分は遠慮して出て行つた。

「如何かなさいましたか。」

「いやあれからずつと眠りませんので……。」

「早速ですが、さつき仲井さんにも申して置いたので十分事情は判つて居られると信ずるですが……。」

「事件の事ですか。あゝあんたは、私が何か嘘を云つて居るやうに云はれたさうですね。」

「詰まり、知つて居る事を隱して居られやせんかといふ意味ですよ。」

「知つてゐるとは何ういふ事をですか。」

「はつきり云ひませうか、殺人犯人をです。奥さんを殺した人間をです。」

「何うしてそれを私が隱してゐると云はれるのですか。」

「斯うなつたらすつかり云つてしまひませう。此處には貴方と私と二人切りだから話しますが、ねえ簑川さん、貴方は奥さんの爲めに、犯人を隱してゐられるのでせう。」

博士の眉毛がビリッと動いた。

「貴方は、奥さんの名譽、御自身の名譽を考へて默つて居られる。その氣持ちは十分御察しする事は出來ます。しかし、それが貴方にとつてはいろ〳〵の意味から云つて不利益なのです。此處をよく考へて下さい。簑川さん、場合によつては貴方自身、かうやつてベッドの中で暢氣に私と話をして居られなくなるかも知れないのですよ。」

博士は目をつぶつて何か考へてやるやうだつた。楢尾警部はもう一息だと感じた。

「簑川さん、貴方が折角默つて居ても、我々の方の調べがどん〳〵進んでゐるのです。奥さんがどんな人と交際してゐたか、どんな人が奥さんの周圍にゐたか、よく判つてゐるのです。詰まり貴方が默つてゐる事は今となつては全く無意味といふべきです。いや、無意味どころではない、度々申した通り貴方の爲めに有害なのです。」

楢尾警部はたて續けにしやべりながら、博士の表情を油斷なく凝視めてゐる。

「今夜にももう犯人は捕まります。私は特に申上げたい。早く犯人の遺留品を御出しになるが宜い。これは刑法上の問題ですよ。」

「遺留品？」

「さうです。犯人がお宅に殘して行つた品物です。これを匿した人がある。それは貴方に外ならないのです。出すなら今ですよ。犯人が捕まつてからでは事重大となります。貴方の法律上の責任は逃れられません。」

楢尾警部はきつぱり云ひ切つた。

博士の顏色には苦悶の樣子が現はれた。

「ふゝん、白狀しようか何うしようかと迷つてゐるのだな。もう直ぐだ。」

警部は心の中でさう思つて機を外さず、すかさず、最後の一太刀を入れた。

「犯人はもう捕まります。あの男が自白してからでは……。」

「あの男？」

「さうです。あの男が自白してからではまにあひませんよ。」

「あの男とは……一體誰です？」
楢尾警部は博士の案外圖々しいのに呆れたやうだつたがズバリと云ひ切つた。
「井上道夫ですよ。奥さんが平生可愛がつてゐた藤枝氏の所の助手ですよ。」
「おや、貴方は井上を犯人だと云ふのですか？」
「無論です。さ、早く井上の遺留品をお出しなさい。」
今まで苦しさうにしてゐた博士は何故か急に安心したやうな樣子を見せた。
「先刻から貴方は犯人の遺留品々々と云はれるが、何うしてその男が私の所へ品物を殘して行つたと決めて居られるのですか。」
「例へば、奥さんの咽喉を絞めたもの……こんなものがないぢやありませんか。」
「そりや犯人が自分で持ち去つたに違ひありません。私が死體を發見した時から無いのです。そんなものは犯人が殘して行かぬ方があたり前でせう。」
「ふん、それはさうかも知れない。しかし一番、私が疑ふのは、貴方が嘘を云つてゐる點です。貴方は犯人が誰だかを知つてゐるのだ。即ち井上が犯人だといふ事を知つてゐる。それだから

こそ、曖昧な事を云つてゐるのぢやあないですか。何うして貴方は犯人を知つたか。犯人に此處で會つたか。又は犯人が何か殘して行つたからです。」
楢尾警部は聊か景色ばんで詰め寄つた。
しかし今度は博士もおとなしくはしてゐなかつた。
「曖昧とは何です。私は始めから眞實の事を云つてゐるのだ。先刻からあんたは嘘を云つてゐるとか曖昧な事を云つてゐるとか云はれるけれど、何を根據にさう云ふ事を云ふのですか。」
博士の調子が急に强硬になつて來たので、楢尾警部も聊か驚いたやうだつたが、やがて何事か決心した樣子で改めて云ひ出した。
「簑川さん、それではつきり云ひませう。念の爲めに云つて置きますが、これは私一人の考へではないのですよ。判事も檢事も、皆この點では意見が一致してゐるのですが、貴方は奥さんの殺された時間を胡魔化してゐるのです。簑川さん、貴方は死體が硬直を起すのは死後何時間位經つてからだか知つてゐますか。……我々の經驗する所ではあれは少くも死後八時間を經過しなければ起らないものなのです。法醫學の教へる所に依れば、死後硬直といふものは早く

ても死んでから八時間、遲い場合は二十時間を經過してから現はれるものなのですよ。貴方が警察に電話を掛け我々が此處に驅けつけたのが十日の夜八時四十五分頃でした。その時、夫人の死體は明かに硬直狀態に入つてゐました。その故、奥さんは遲くとも十日の午後一時頃には死んでゐた筈なのです。」

「そんな事はない。斷じてない。」

「お待ちなさい。我々は現代の科學を信じなければなりません。貴方が何と云はうとも我々は科學を信じます。……從つて貴方が放送局に行かれた頃には、既に奥さんは冷たくなつてゐた筈なのです。」

「でも、電話が掛つたではありませんか。」

「それは此方から承はりたかつた處ですよ。簑川さんあの時放送局に電話を掛けて來た女は一體誰ですか。」

「馬鹿な事を問ひ給ふな！　度々云つてゐる通りだ。私の妻が二度までも電話を掛けて來たのだ。私は科學より何より自分の耳を信用する。貴方の云ふ通りだと、放送局に私が出掛ける時

に既に妻は死んでゐたといふ事になるが、私はちやん妻と喋べつて別れたのだ。私はこの目で妻を見、この耳で妻のいふ事を聞いてゐるのだ。馬鹿々々しいにも程があるといふものです。」

博士は奮然として云ひ切つた。

「簑川さん、しかし奥さんがその時まで生きてゐた證據はありませんか。」

「證據？　私が自分で見た位確かな證據はないぢやありませんか。幾ら耄碌してゐても私は自分の女房を間違へることはありませんよ。」

「今云ふ通り、死體の狀態は貴方のいふ所と全く矛盾してゐるのです。かういふ場合に警察官たる我々が何う考へてゐるかお判りでせうな。」

「そんな事は私は知らん。私はたゞ事實を云ふだけです。」

「放送局から迎ひが來た時、奥さんは出られなかつたさうですな。貴方自身が出られた。詰まり、あの頃、奥さんの生きてゐるのを見たのは貴方以外には一人も無いと云ふ事になる。」

「それはさうかも知れん。」

「簑川さん、もう一度はつきりいひます。貴方は今まで云つて來た事を、飽くまで固執します

か。」
「無論ですよ。外に云ひやうがないぢやありませんか。」
「さうですか。」
楢尾警部は嚴然と云つた。
「さうですか。では仕方がありません。私は實は貴方の地位を考へ、出來るだけ好意を以て今まで立ち廻つた積りなのです。しかし、それが貴方に判らなければ止むを得ません。」
「貴方の好意が判らんのではないのです。たゞ事實以外に云ひやうがないから、私はありのまに云つてゐるのです。」
「ではいづれ出る所に出て云つて頂きませう。」
かういふと楢尾警部は、立ち上つてドアを開けた。
仲井長太郎が心配さうに立つてゐたが警部に
「如何でした。やはりはつきり申しませんでしたらうか。」
と聞いた。

「どうも困つたものです。博士位の人に利害が判らん筈はないのですが、仕方がありません。仲井さん、あなたにも大分御厄介をかけましたが、これから博士には役所でお目にかゝる事にしませう。」
心配顔の仲井をあとに、楢尾警部はさつさと博士邸を後にしてしまつたのである。

一一

楢尾警部が、簑川博士邸に行くと云つて出て行つたあと、藤枝眞太郎はたつた一人でまるでやけに見える位エーアシップを、立てつゞけに四五本すひつゞけてゐた。
井上道夫が簑川百合子を殺した、とはどうしても信じられない。けれども彼が簑川百合子とひそかに懇意の仲になり、兇行當日、彼女を訪問したらしい事實だけはどうしても信じないわけには行かない。
懇意とはどの程度の懇意だらう。
藤枝は、百合子が人妻である事を思つて烈しい不安に襲はれはじめた。

それにしてもあの手紙の中にあつたS子の事に關してとは誰の事かしら、彼がかう考へてふと或る名を思ひ浮べた時、ドアが開いて、井上道夫が、元氣な、健康さうな顔をしてはひつて來た。

「先生、只今。遲くなりました。しかし、おいひつけの事は可なり十分に調べて來ましたよ。」

「や、御苦勞御苦勞、まあ一休みした給へ。お茶でものみながら報告を聞かうよ。すまないが僕にも一つついでくれないか。」

元氣に働く井上青年の樣子をぢつとながめて居た。整つた體軀、男性的な顔、賢明さうな目、なるほど、簑川夫人に可愛がられてもいゝやうな青年だ、と彼は今更つくづくと感じた。

「ありがたう、君もやり給へ。さ、まあそこにかけ給へ。」

かういひながら藤枝は、ぐツと一杯茶をのんだが、それは咽喉の渴きをいやすといふよりは、何か重大な事を云ひ出さうとして心を强ひて落着けてゐるやうに見えた。

「井上君、少し眞面目に君と話したい事があるんだ。」

「は、何です。……」

「君は僕の所に來てから未ださう長くはない。しかし僕とつき合つてゐる間に、僕の氣心も大抵のみ込んでくれた事だと思ふ。僕がどの位君を信じ愛し、理解してゐるか、僕がどんなに誠實に君を立派なものに育て上げようとしてゐるか、君は十分判つてゐてくれるだらうね。」

「はあ、無論先生の御親切は判つて居ります。」

「僕だつて君の眞面目さ、悧巧さはよく知れてゐる。だからこそ將來はこの事務所の主人になつてもらひたいとさへ思つてゐるのだ。僕が君を信じ、又君が僕を信じてゐてくれる以上は、可なり立到つた事を聞いてもいゝと考へるが……。」

「はあ、何でも仰しやつて下さい。」

「では聞く、君は戀をしてゐるんぢやないかね。而も極めてひそかに……。」

「……。」

「無論、ひそかに戀をしてゐたからとて僕はそれを惡いといふのぢやないのだ。君は若い。若くて美しくて賢明な青年が戀をし又戀されたからとて少しも不思議はない。しかし、君は危險な戀をして居るのぢやないか。……ねえ君、僕が君に聞き度いのはその點なんだよ。……無論

判るだらうが僕は文學者や藝術家でないから僕が危險な戀といふのは極く世俗的な意味で云ふのだ。形而下的の意味でいふのだ。一言で云へば、法律を冒すやうな戀をしてゐやしないかといふのだよ。」

「法律を冒すんですつて。」

「さうさ。例へば、夫のある女と戀愛關係に入るといふやうな場合だ。」

「先生、では先生は僕が人妻と……？」

「井上君、はつきり聞くが、君は簑川博士の奥さんと何時から仲がよくなつたんだい。」

「え？　簑川博士の奥さん？　先生は、僕と奥さんとの間を疑つてゐられるのですか。」

「さうだ。君が百合子夫人と人知れず懇意になつてゐた事はまさか否認はしないだらうね。」

「はあ……。」

井上は急に靑ざめて下を向いた。

「百合子夫人には立派な夫があるぢやないか。その百合子夫人と戀愛に陷る事がどんなに危い事か君は考へた事はないのか。くどくも云ふ通り、僕は君のやうな若い人が戀をする事を惡い

とは云はない。しかし法律を冒すやうな戀を僕は許すわけにはいかないんだ。」

「先生、しかし僕は……。」

「まあ聞き給へ。僕は君の性格を信じ切つてゐたのだ。君がそんな危い事をしてゐるとは夢にも知らなかつた。それは僕の誤りだつたかも知れない、僕は自分の不明を恥ぢるばかりだ。しかし君は、君で相當の覺悟をする所がなければならない筈だ。井上君、僕だつて今度の百合子夫人の慘殺事件に關しては、あの博士の口振りから察しても、何か夫人の戀愛事件が中心になつてゐるのぢやないかと實は疑つてゐたのだ。之は昨日も君にこゝで云つた通りだ。が、まさか君がこの渦の中に――而も眞ん中にゐるとは思ひもかけなかつたよ。僕と同じ疑ひをもつた楢尾警部は、例の機敏な腕前をあらはして、早くも君といふ人間をトレースしてしまつてゐる。彼は今までこゝに居たよ。さうしてさん〳〵大きな事を云つて歸つたばかりだ。僕も今日といふ今日は一言もなかつた。楢尾警部は『名探偵の助手實は犯人！　一寸面白いぢやありませんか』と云つてゐたぜ。」

「え？　犯人？　僕が……ですか？」

「さう。楢尾君のテオリーはかうなんだ。君と夫人とがひそかに仲がよくなつてゐた。一昨日君は手紙を出す氣で書いたのだが、事情が切迫したかして自身で博士邸に行つた、その時間は判らん、そしてその後夫人が死體となつて發見されてゐる。一方博士が極めて曖昧な供述をしてゐる。こゝで嫌疑は君にかゝつてゐるのだ。僕にせよ、辯解するわけにいかないぢやないか。――勿論、楢尾君が、トリツクを用ひて君に書かせたあの變な手紙を僕に示す前に、既に話の間に楢尾君が誰を疑つてゐるかといふ事は僕には判つてゐた。だから、僕は彼が君の名を出す前に、暗に君を出來るだけ辯解はしておいたのだ。例之、君が夫人の死の直前に博士邸にゐたにもせよ、それを以て直に君を殺人犯人也とするわけにはいかないといふ事、いや僕は君があそこに行つた事すら疑はしいと力說してはおいたのだ、けれども、考へて見ると、博士夫人とひそかに仲よくなつてゐる君を、僕は充分辯解はしにくいのだよ。ね、僕の氣持ちは君充分わかつてゐてくれるだらう。」

「先生、そりや餘りです。何もかも云つてしまひます。けれど僕が犯人だなんて飛んでもない事です。いえ、第一僕は百合子夫人と決して戀愛になんか陷つてゐたのぢやありません。」

「だつて君は、變な手紙を夫人に書いたぢやないか。」

「は、それは書きました。しかし、決して二人の間には疚しいところはないのです。……もうかうなつては何もかも云つてしまひますが、夫人と僕が知合になつてゐた事は、たしかです。之を早く先生に申して置かなかつたのが惡かつたんです。前の先生の處に居た時、簑川博士邸へは法律上の用件で數回參りました。其の頃から顏はよく知つてゐたのでしたが、二人で話をするやうになつたのは先々月帝劇で開かれたジヤツク、テイボーの音樂會の夜からでした。偶然僕はその夜夫人がやはり來て居るのに出會つたのですが、夫人は僕を早くも認めて歸りに銀座でも一緒に散歩しないかつて誘はれたのでした。今から思へばその時斷つてしまへばよかつたのですが、僕も別に用事はなし、正直に申上げますと、あゝいふ美しい婦人と銀座を歩く事もいやではなかつたので、その夜は遲くまであの邊をぶらついて別れたのです。それから後、ちよい〳〵夫人から誘はれて、一緒に邦樂座で映畫を見たり、ホテルのグリルで御飯を食べたりした事があります、――こんな事は僕からは云ひにくいのですが、云はなければならないと思ひますから申上げますが、百合子夫人は、僕に可なり好意をもつてくれ、大變可愛がつてく

れたと思ひます。しかし、誤解のないやうに明かにして置きますが、さきにも申した通り、二人の間には絶對に疚しい事はありませんでした。夫人の方がどうであらうと、僕は夫人に戀してゐたのではありません。のみならずいくら馬鹿な僕でも、夫のある女の人と、深い交渉にはひる事がどんなに法律的に危險であるかは充分心得てゐるのですから……。」

「君はしかし百合子夫人と懇意になつてゐた事を大變祕密にしてゐたね。」

「は、それが惡かつたのです。今となつては、それが誤解のもとになつてしまつたのですが、これは夫人の要求によるものなのです。先生にも誰にも云つてくれるなといふ事でした。」

「君は博士が君を疑つてゐたとは考へないかね。」

「それは僕には判りません。けれど夫人はいつも、なに、判つたところで、うちの人は如何する事も出來はしないのだから、と云つてゐました。」

「では君は、博士夫人と懇意だつた事は認めるが、決してそれ以上の深い交渉はなかつたといふのだね。」

「斷じてありません。どうか僕を信じて下さい。——それに……それに、斷じてなかつた

理由が、まだ一つあるのです。實は僕——これはいづれ先生に改めて申上げるつもりでゐたのですが、妻にしようと思つてゐる婦人があるのです。」

「それが、君の手紙のS子といふ人かい。」

「はあ、さうです。」

「博士の所に暫く來てゐた家政婦の大場さよ子といふ女だな。」

「はあ。」

井上道夫の青ざめた頰にこの時、さツと紅がちつた。

「ふん、それで？」

「大場さよを知つたのも、丁度夫人を知つたのと同じ頃でした、度々博士邸に行つてゐるうちに、大場さよと私は實は戀し合ふやうになつてしまつたのです。先生、こんな事を今自分から云ふのは恥かしい事です。然しいはなければ、僕ばかりではない、大恩のある先生に御迷惑がかゝると思ふから云つてしまひますが、二人の間はわりに早くから進んだのです。さうして、お互に將來は夫婦になる約束までしてしまつたのでした。」

「すると、君は一方に妻にしようといふ女がありながら、一方では博士の夫人と仲よくしてゐたといふわけになるね。」

「先生、これは僕の純な事をいひ度いために申すのですが、夫人との間は何でもないのですよ。たゞ夫人が、しきりに僕を誘つてくれるものですから……。」

「しかし君はそれを斷然斷はればよかつたぢやないか。」

「其の點は何と云つても僕の落度です。一言もありません、……それが爲、自分があの恐ろしい人殺の犯人と思はれてゐるばかりでなく、先生にまで迷惑をかけたとは……あゝ實に僕はどうしたらいゝでせう。」

藤枝は、かつて檢事局に檢事として勤めてゐた時、被告人等を調べる時のやうな樣子で、この青年の心の中にうづまいてゐる嵐に、少しも感情を動かされてゐない調子で冷靜に井上の惱ましい表情をながめてゐた。

「では聞く、君があの手紙に書いた事は何事なのだ？事に關して云ひ度かつたのは一體何事なのだ？」

急に十日になつて夫人に會ひ、S子の

しかし井上道夫は答へなかつた。否、答へられなかつたのだ。彼は何を苦しんでゐるのか、頰を傳つて流れる涙をハンケチでしきりとぬぐつてゐるが一言も發しなかつた。

「それを明かにしてくれないと君にかゝつてゐる嫌疑は晴れないかも知れないぜ。ねえそして君は、あの日、何時頃夫人にあつたのだね。」

井上は不相變默つたまゝだつた。

「え？　はつきり答へてくれ給へ。重大な點だよ。君はいつ頃百合子夫人と會つたのだ？」

「先生、僕は夫人と會ひはしないのです。」

「だつて君はあの日、博士邸に行つたぢやないか。」

「いえ、參りません——決して行きはしないのです。」

「井上君、よく考へてくれよ、この點を君が明かにしてくれないと困るんだ。君は行かぬと主張してゐる、實は僕だつてそれを信じたい。さうあつてほしい、しかし、君は、動かす事の出來ない證據を殘して來てしまつてゐる。……博士の書齋に机があるだらう。君はあのニスの上にはつきり君の右の指の後をつけて來てしまつてゐるぢやないか。」

「……。」

「かういふ證據があるのになほ且つ君があそこにあの日行つた事を否認する以上、君はどうしても二つの事をはつきりしてくれぬと困るよ、第一は十日の午後から夜まで君がどこにゐたかといふ事を明かにする事、第二は、机の上に君の指紋がついたのは十日でなくて他の時であるといふ事を明かにする事だ。」

然し井上道夫はもはや何も答へなかつた、彼は机の上に面を伏せて、たゞ意氣地なく涙を流してゐるばかりだつた。

藤枝の心の中に今更新しい不安が湧いて來た。

「こりや、ことによると……。」

彼はかう考へながら、哀れなこの青年を默つてながめてゐた。

部屋の中はたゞ靜かだ。藤枝がくゆらすシガレットの煙が雲のやうに、渦を卷いてその中を漂つてゐる。

爆發しさうになる感情を、強ひておさへてゐる井上の苦しさうな咽び泣きが、部屋の空氣を

いたましく重苦しくしてゐる。

「此の男は到底僕には白狀しないな。して見ると、この男は純情の餘り、一時の亢奮であの恐ろしい事をやつたのかしら。」

暫らくして藤枝が立上つた。

「では僕は今日は家へ歸るから、君もよく考へた上で、決心がついたら僕の處へ來て話をしてくれ給へ。……君は僕の立場も考へてくれなくては困るぜ。……では。」

机にうつぶしたまゝの井上をあとに殘して藤枝は、事務所を出た。

が、二三町歩いた時、彼は不意にある不安におそはれた。

「彼奴、思ひ餘つてどうかしやしないか。」

彼は一寸引返さうとした。しかし又思ひなほして家路にとついた。さうして心の中で呟いた。

「殺人犯人として捕まるより、自決した方が彼の爲には幸かもしれない。これがせめてもの俺の心やりだ。」

一三

其の夜、更けるまで藤枝眞太郎は、何か井上道夫が云つて來るに違ひない、どうか少しも早く眞相をしらせてほしいと、心に祈り心に待つてゐたけれども、それは全くの空だのみだつた。

井上青年の爲によかれと祈る感情と、冷かな犯罪の探偵家としての理性とが、心の中で入り亂れて彼をおそつてゐた。

三月も十二日になつたといふに、浮氣な天候はいつの間にか暗い雲を漂はせ、寒暖計の水銀が俄かに降下したと思ふまもなく、粉のやうな雪が、都大路を銀色にかざりはじめた。

淋しい靜かな夜である。

彼ははじめて、こんな苦しい不安な夜を過さねばならなかつた。

「何故井上はほんとを云はないのだらう。まさか彼が人殺をしたとは思へないけれども彼が博士邸に行つた事まで否認するのはよく〳〵の事がなければならぬが。——明かに彼は今日俺に嘘を云つた。何故だらう。」

井上の純眞を信じ切つてゐる藤枝には、楢尾警部のやうに、直に、井上が犯人だから嘘をついてゐるのだとは思ひ切れなかつた。

彼は夜おそく可なり多量の睡眠劑を服して就床した。

夜どほし、いやな夢を見つゞけて、でも藥のせゐで一應は熟睡したらしく、目がさめたのは、翌朝卽ち三月十三日の午前十一時頃だつた。

漸く雪は止んだけれども外は一面の銀世界である。

頭が重いので、體溫器を脇の下に入れて見ると、微熱がある。とこの中から出る氣にもならぬ、不安な氣持ちで終に、靜養する事にきめた。

しかし、誰からか何とか賴りがありさうなものと、しきりに床の中で悶々としてゐたけれども、一日どこからの音沙汰もない。

相良警部はどうしたか、黑澤玄吉はどうなつたか——考へて見ると默つて寢てゐるわけにも行かない。

しかし彼は昨日楢尾警部に言はれた一言が胸にしみてゐた。

「あなたの從來の經歷及び現在の地位があなたを疑はせないのですよ。」
と警部は云つた。それは取りも直さず
「君の弟子の井上を疑ふ以上、一應君が疑はれても仕方がない。」
といふのと同じ事ではないか。
こんな慘めな位置にゐる自分が、なまじ積極的に動いたりせぬ方がこの際よからう、と彼は考へた。さうして、誰かゝら何かしらせのある迄自分は動かぬ方がよいと決心した。
それにしても、簑川博士はどうしたのだ。博士は第一に自分にこの事件を賴んだのではなかつたか、それが、何も云つて來ないとは。——彼はかう考へて又或る不安におそはれはじめた。
稻尾警部が斷言した通り、博士はやはり井上を怪しいと睨んでゐるのだらうか。
日暮近くなつて、玄關のベルが鳴つた。
「誰が來たらう？」
氣を紛らすために、讀みかゝつてゐた英國の探偵小說をぱつたり伏せて藤枝は床の上に起き上つた。刺を通ずるまでもなく元氣な聲が聞こえて、やがて部屋に現れたのは東京地方裁判所

檢事局の帶廣檢事であつた。
「おや、どうかしたのかい。」
「ナニ、大した事はないんだが、一寸風邪氣なのでね。」
「さうか。それはいかんね。何しろこんな時に雪が降るつていふ氣狂ひ天氣だからな。」
「早速だけれど、何か新しい事が起つたのかい。」
「うん、今警察で井上道夫に一寸當つて來たのでね。」
「え？　警察で？　ぢや、稻尾君はとう〳〵井上を引つぱつたのか——無理もない。僕から十分問ひ訊す事になつてたんだが、僕がうまくやれなかつたからな。」
「しかし、警察では少くも表向きは保護するために身柄をおさへてるんだぜ。」
「ぢや何かい、彼思ひ餘つてどうかしたのかい。」
「成程、君は何も知らないんだな。それぢや驚くかも知れん。井上が昨夜おそく自殺をはかつたのさ。劇藥をのんで自殺をはかつたのだが、幸に量が多すぎて吐いてしまつたので生命には別條なしだ。否、もう病院に行く必要もなくすつかり元氣回復の態だよ。」

半ば豫期しないではなかつた。けれど今あの青年が自殺をするといふのは何を意味するだらう。自殺は自白も同然ぢやないか！

その位なら昨日何故俺の前で自白してくれなかつたのだ！　俺はそんなに信頼出來ぬ先輩なのだらうか。

井上道夫からさへ信じられぬ俺では、楢尾警部に信じられぬのも仕方のない事かも知れない。

それにしても、かつて同じ役所で机を並べたよしみでわざ〳〵訪ねてくれた帶廣檢事を、藤枝は今更なつかしげにながめずには居られなかつた。

「さうか。そんな事があつたのか。僕は少しも知らなかつたよ。君は楢尾君から詳しく事情を聞いたらうが……。」

「うん、警部から詳細に事情は聞いてゐる。警部は明かに井上を疑つてゐる。而して、井上の自白は、楢尾警部を滿足させるに十分なのだ。」

「何だ。彼、自殺しそこなつて、自白したのか？」

「さうだ。殺人犯人だといひ出したのだ。尤も遺書にさう書いた以上、今更ひるがへす事も出

來まいがね。」

「遺書？　誰にあてた遺書だね。」

「大場さよ子に一通、さうして君に一通遺書がある。之で見ると、井上の自殺は狂言ではなかつたらしいよ。ほんとに之を書いて死ぬつもりだつたのだ。」

帶廣檢事はさういひながら一通の封書を懷中から取り出して藤枝の前に置いた。

「君への分は嚴封してある。一應君にあてられてあるから君に渡す。然しなるべくなら參考にこちらにもらひ度いのだが……」

「そりや無論かまはない。ともかく開けて見るぜ。」

藤枝はかういひつゝ、檢事の目の前で自分に當てられた、遺書と書かれた一通の封を切つた。

中から出た紙には極めて簡單な文句が記されてあつた。

先生、申譯ございません。之までの御恩を仇にしておかへしする事、かへすがへすも殘念です。死んで御詫びを申上げます。御許し下さいまし。

井上道夫

十二日

藤枝先生

「非常に簡單だな――犯行のことについては何もふれてゐない。」

藤枝はかういひながらその手紙を帶廣檢事に手渡したが、この遺書を認めた時の井上の心中を察して思はず目がしらのあつくなるのを感じた。

「帶廣君、君は今僕に、君への分は嚴封してある。と云つたねえ。さよ子にあてた一通は封がしてないのかい。」

「さうなんだよ。開封のまゝになつてゐた。誰も手をつけた形跡はない。はじめから封じてないんだ。」

「で、その內容は？」

「之が極めて彼の爲に不利益なのさ。何、之も甚だ簡單で僕は覺えてゐる。かうだ。

簑川博士夫人殺害の犯人は僕です。許して下さい。あなたはどうか幸福に生きて下さい。

十二日　道夫

さよ子様

といふんだ。」

「ふーん、明かに犯行を認めたね。」

「さうだ。明かに自白してゐる。さうして彼は警察でもはつきりと自白を維持してゐるんだ。」

「さうか。」

藤枝は默つた。帶廣も默した。二人は何か互ひにふれたいところをふれられずに、探り合をしてゐるやうに見えた。

しかしとう〳〵堪りかねたと見えて、藤枝が口を切つた。

「之は君の職務に立至るから强ひては聞かないけれども、彼の自白は君にピンと來るかい？」

「さあ、そこなのだ。僕が今日わざ〳〵君を訪ねたのは。――僕が彼を起訴すれば……。」

「おや、君はまだ起訴しないのか。」

「無論だよ。君だつて僕のやり方は知つてるぢやないか。被疑者が自白したからつてさうすぐにオヒソレと起訴しやせんよ。――僕が之を起訴すれば、君だつて彼との從來の關係上、君自身法廷に立つて辯論をしないでも、出來るだけ彼の有利な證據をつかみたがるだらう。つまり

君は必ず被告人の防禦の側に立つだらうと思ふ。」

「まあさうだな。この事件で、もし彼が起訴されゝばね。」

「僕は君とは昔机を並べてゐたし、又君が檢事をやめてからでも多く共同戰線をはつて犯人を罰する事に努力しつゞけてゐた。ところが今度は君とは反對の立場に立つ事になる。君は味方にしては頼もしいが、正面衝突の敵としても相手にして恥かしい人間ではない。相手にとつて不足は少しもない。」

「それはお互ひにだ。僕からも同じことをいひ度い。」

「さあそこだ。お互に反對の立場に立つても卑怯な事はしたくない。フエーアプレーでやり度い。僕が今日こゝに來たのもそのわけなのだ――僕は井上の爲に有利なところを考へてやつて來たのだ。」

「彼の爲に有利？」

「さうさ。一體世間では、われ〳〵檢事といへはたゞむやみに人を罪にする職業だと思つてゐる。しかし檢事はそんなものではない。これは十分君の知つてゐる通りだ。出來るだけ被疑者

の利益をも考へるべきだと思ふ。そこで僕は井上に有利な疑ひを可なり持つてゐる。君はそこを出來るだけ捜査して見給へ。それでもなほ且つ彼のために潔白の證據があがらず僕の方が彼を疑へば斷然彼を起訴する。君と最後の意見が違つた時はいさぎよく法廷なりどこなりで相まみえようぢやないか。」

「うむ、ありがたい、さすがに君だ。僕だつて目ざす所は正義の二字あるのみだ。無意味な辯解はやらないつもりだ。――で彼はどうして夫人を殺したといふのだ。」

「彼の自白をそのまゝ傳へるから聞いて居給へ。彼が夫人殺害の直接の動機は、一時の激情に驅られたといふんだよ。之は君も多分聞いたらうけれども、彼は夫人とは、本年一月頃から仲がよくなつてゐた。しかし絶對にいまはしいことはなかつた、といふのだ。」

「うん、そりや僕にもさういつてゐる。」

「その理由として井上は大場さよ子といふ若い女の事を話してゐる。つまりさよ子と井上とが最近戀愛關係に入つてゐる。さうして夫婦約束までしたとかういふんだ。」

「それも僕に云つてゐる事と同じだ。」

「ところで、井上は一方さよ子とこんな仲になりながら、一方、夫人と仲よくしてゐる。この關係がいつまでも續き得るものでない事は誰だつて考へ得る。井上がさよ子と仲がよくなつてゐる事が夫人に知れ、さよ子には又夫人と井上とが懇意になつてゐる事が知れてしまつた。そこで事は多少面倒になる。ね之は多少だ。何故かつて一方は既婚の夫人であり井上がどう思つたところで、又夫人がどう思つたところでどうする事も出來るわけはない。一方は夫婦約束をした仲で、双方の親さへ許せば立派に夫婦になれる間なのだ。誰が考へたつてさう大してもめる話ではない。たゞ多少もめさうな話ではある。井上自身も大したことにはなるまいと思つてゐたさうだ。

ところが、だ。これは、博士夫人のやうな女の心理なのかも知れないが、井上の戀人としてのさよ子の存在がはつきりと判ると、夫人は妙に二人の間を邪魔をし始めた。出來るだけ二人を近づけないやうにする。二人を離して見た處で、自分はどうする事も出來ないくせに、さういふ事をやるのださうだ。」

「そりやありさうな話だな。井上のいふ事はほんたうだよ。」

「君、今からさう辯護しては困るよ。まあ、終りまで聞き給へ。――そこで大場さよ子の方でも非常に心配して母親にはつきり打明けた、君はもう調べたらうがさよ子には父はないのだ。萬事母が父の代りになつてゐる。それが、今月の初めなのださうだ。そこで許しが出さうなので、さよ子が夫人にそれを云ふと、さあ大變なんだ。大變なヒステリーを起してさよ子は即日博士邸を追拂はれたわけよ。一方井上の處に電話がむやみと掛かつて井上は夫人に呼び出されて、散々皮肉を云はれるといふことになつた。」

「さういへば、今月の初め、僕のオフイスへも誰か、わからぬ女から度々彼に電話が掛かつたよ。」

「しかし井上とさよ子の氣持は堅かつた。九日の日にさよ子と井上は會つてゐる。双方の親も正式に二人の間を許した。そこで彼は堅い決心で博士夫人に二人の事をはつきり告げようとした。十日になつて例の手紙――ホラ彼か博士邸へ置いて來た手紙ね、あれを書いて出ようとするところへ、――之が夕方六時頃だつたさうだ、さよ子から電話が掛かつてどうなつたかと聞く。『あなたが行かぬなら私が夫人に直接あつて來る。』といはれるので、二人を會はせたら女

同士どんな事になるかわからんと思つて、さよ子には『直に自分が博士邸へ行くからお前は行くな』と云つて置いて、手紙をポケットに入れたまゝ博士邸に出かけたとかういふのだ。」

「何時頃？」

「夜の七時過ぎだといふのだ。七時半がもつと廻つてゐたらうといふのだ。」

「そしたら夫人がゐたといふのか――生きてゐたと？」

「さうなんだ。彼のその日の行動を調べると夕方六時頃までは――即ちさよ子から電話が掛かるまではたしかに家にゐた。夜七時半過ぎに行つて見ると夫人がたつた一人ゐた。そこでいよいよさよ子と正式に近く結婚するといふ事を云つたら、夫人が、大變な嫉妬で、さよ子をさんざんに罵つた揚句、井上の事をひどく罵詈したいふのだ。さよ子の事を餘りひどく云はれて、彼はかつとなつて、夫人を脅かした。ところが夫人は急に井上の態度を見て、悲鳴をあげて。『人殺し。』

と呼んだので、彼はあわてゝ口をおさへようと夫人に飛びかゝつたが、氣がついて見ると夫人の息が絶えてゐた、とかういふのが彼の一應の自白なんだよ。」

一三

「何で殺したといふんだ。」

「今いふ通り、夢中に飛びかゝつたからどうしたかよく判らんといふけれど、まあ兩手で喉を締めたといふ事になるな。」

「それで、……。」

「その時、ポケットからシースを落したさうだが、手紙を落した事は氣がつかず、そのまゝ逃走した、とかういふんだ。」

「君は、夫人と井上がどこで話したか聞いたらうね。」

「無論聞いた。通された場所は、いきなり博士の書齋。茶など飲む間もない。すぐ爭ひが始まつたと、かういつてゐる。まあ之が彼の自白の全部だよ。」

「成程、それでよく判つた。君がさつき云つた楢尾警部を滿足させるには十分だといふ言葉がはつきりした。つまり君を滿足させるには不十分だといふわけだね。」

藤枝はかう云つてにやりとした。
「帶廣君、僕が昔の通りの役人でゐて、君の立場に立つとすれば、少くも次の點だけをこの自白については疑ふよ。……」
「うん、君の思ふ所を遠慮なく云つて見てくれ給へ。」
「第一に百合子夫人殺害の動機がはつきりしないね。成程、井上の自白によれば一應の説明はつく。戀人を罵られたといふ一時の怒りから相手をやつつけた、といふ事は有り得ない場合ではない。しかし、井上のやうな位置にゐるもの、――卽ち大切な戀人を持つてゐてそれと近々結婚しようとする男が、そんな事で人を殺すものだらうか。」
「藤枝君、けれど、殺人の動機なんていふものはさうはつきり外に表はれるものぢやないよ。君の疑ひにしても、それは今までの井上の自白を全部信じるからその殺人の動機がをかしくなるのだ。われ〳〵はもつと惡く考へる事が出來る。例へば、井上と夫人の間をもつと深刻に考へる事が出來ないわけではない。さうすれば、或は彼が夫人を殺すのが當然だつたといふやうな事實が出て來ないものでもないからな。」

「そりや君のいふ通りだ。だから僕も動機の點に就いては强ひては爭はない。たゞ一言云つておくが、假りにさよ子、百合子夫人この二人に關する井上の供述が事實だとすれば、さよ子が夫人を殺すか、夫人がさよ子を殺した方が自然だと思はれる。」
「それやさうだね。」
「第二に妙なのは殺人の方法さ。われ〳〵だけしか知らない事だけれども、あの死體の喉の所には何か紐のやうなものでくびられた痕が明かについて居た。だから決してあれは手で締められたものではない。この點については井上の自白は事實とたしかに矛盾してゐる。」
「さうだ。」
「第三に、これは實に奇怪千萬だが、井上も亦、十日の午後七時半頃まで夫人が生きてゐた、といふ嘘を云つてゐる。これは度々の事だが、君だつて信ずる事は出來まい。こゝでかういふ事になつた。百合子夫人が、十日の午後七時半頃までこの世に生存してゐたといふ事實をはつきり主張する人間が三人になつた。卽ち簑川博士、黑澤玄吉、而て井上道夫だ。而もわれ〳〵の經驗によれば、死體の强直は、死後八時間經たねば起るものぢやない、科學の敎へる所に矛

盾して、三人までがこんな不思議な供述をするのはどういふわけだらう。」

「この點が、今度の事件で最も奇怪な點らしいよ。この謎をとけば今度の事件も案外樂に解決出來るのかも知れない。藤枝君、君はこれについて何か考へはないかね。」

藤枝眞太郎はこの時、兩眼をつぶつて何か物思ひに耽つてゐるやうであつたが、しきりと、右の耳のあたりを痒さうに搔いては、考へ込んでゐる。

これは彼がいつも何か非常な難問題に出つくわして、それをどうかして解かうと努力してゐる時に限つて表はれるくせなので、帶廣檢事はその默想を邪魔しないやうに自分も暫らく默つて藤枝の顏を眺めてゐた。

暫らくして、藤枝は何か心に思ひ當ることがあつたと見え、やがて、帶廣檢事の方を見てにやりと笑つた。

「ねえ、こゝにかういふ不思議な事實がある。發見された死體はどう考へても、死後八時間を經過してゐる。一方に夫人が死體となつて發見される二時間位前まで夫人が生きてゐたといふ事を主張するものが三人ある。この一見矛盾してゐることを矛盾でなく考へる事が出來ればい

いわけだね。」

「しかし君、そんな事は考へ得ないよ。一方を立てれば片方が立たんぢやないか。」

「そこだよ。そこでこの兩方を矛盾なく立てる事が出來れば事件は解決されるんだ。事件の始めからの謎、——どうして夫人は母の死を知つたか、博士の名で掛けられた大阪への電話は誰が掛けたか、これらも直に解決出來るんだ。」

しかし、藤枝はこんな謎みたいな事を云つた切り、その後を續けようとはせず、急に話題を他に轉じたのである。

「そこで又元にかへるが、井上の自白だ。この自白は、ほんたうか嘘か、二つの場合しか有り得ない。ほんたうだと考へるのは稲尾警部だらうし、警部はそれに向つて目下證據がためをやつてゐるだらうが、假りに之を嘘だとする。いゝか、假りに井上が嘘の自白をしてゐるとする。もしさうすれば、何故彼はそんな虛僞の自白をしたのだらう。ねえ帶廣君。」

「さあ、何故だらう。」

帶廣檢事はこの時ずるさうな目つきをして答へた。

暫らく沈默が續いた。
二人の間には又探り合が始まつた。
「例の遺書ね。――大場にのこしたあの遺書さ。あれは何故開封のまゝ殘されてゐたのだらう。」
「藤枝君、君も矢張りあれを考へてゐるね。」
「さうさ、普通の場合では有り得ない事だ。僕に殘した一通でさへ密封されてゐる。それなのに戀人に殘す一通の封をしめ忘れる奴もないものだ。帶廣君、何故彼があれを封じなかつたらう。」
「彼があれを封じるのを忘れたのではないとすればだね。」
「そんな事は不可能だよ、今死ぬといふ間際に、一番大切な戀人にあてる遺書を封じるのを忘れる奴なんかゞあるものか。」
「さうするとどういふ事になると君はいふのだ。」
「何だ、君だつてそんな事は判つてゐるくせに！　帶廣檢事ともあらう者がそこに氣が付かない筈はないぢやないか。」

「まあいゝから君の考へを云つて見給へ。」
「ぢやあいふが、井上は、大場さよ子にあの遺書が讀まれるより先に、一般の人に――殊に警察の人達に眞先に讀まれる事を願つたんだよ。」
「といふと。」
「つまり、犯人は自分だ、といふ事をあゝなつた以上少しも早くいひ度かつたのだ。」
「では何故、昨日の夜になつてからあわて出したのだらう。君に聞かれた時、はつきり云つてしまへばいゝぢやないか。」
「そこが中々面白い所だ、僕の前に居た時はゆつくり前後を考へてゐる間がなかつたのだ、ところが彼が歸宅してからゆつくり考へて見ると、意外な處に危險が來てゐる事に思ひついたのだ。或はとんでもない事を僕に自白してしまつたと氣がついたのだ。そこであわてゝ當局者が犯人に手を出さぬうちに、自分が犯人でございい、と名乘りをあげたわけなのさ。可哀相に、如何に知慧を絞つても井上はまだ若いんだね、僕の前でも、警察でも、隱さう〳〵としながら、危險な話をしてゐるぢやないか。――『犯人は僕だ』といふことはいひかへれば『犯人は僕以

外の者ではない、他をさがしても無駄ですよ』といふ事と同じぢやないか。では、彼が心配してゐる、ほかの者とは誰だらうね。」

「うん、藤枝君、僕の考へも大體君と似たりよつたりだよ。」

「さうだらう、彼の遺書は中々考へて書いてゐる、開封したまゝ置いて、まづ嫌疑を全部自分にかけると、同時に、遺書の形でもつて、自分がかばつてゐる相手に巧みな通信をやつてゐるのだよ『犯人は僕です』といふ言葉だが、之は極めてデリケートだ。註釋すれば『僕が犯人になります、あなたではありません』といふのだ。帶廣君、無論君も御推察の通り、井上は大場さよの犧牲にならうとしたわけさ。しかし、この反間苦肉の計略も、君と僕との存在を無視した話さね、こんな手で欺される僕等ではない。」

「つまり、かばはう〳〵として彼は、自己の信ずる處を暴露してしまつたんだね。」

「さうさ。いふまでもなく、明かに井上は大場さよ子を疑つてゐるのだ、大場さよ子が夫人殺害の犯人ではないか、と今までにも多少考へてゐたのだ。ところが昨日僕の處でさよ子とのことをしやべつてしまつたそのあとで、とんでもない事をしたと思つたんだらう。戀する青年の

一本氣で、死ぬ氣になり同時に自分が犧牲になる覺悟だつたのだ。志はよみすべしかもしれないが細工が未だ若いよ。」

「井上の心配は相當根據がある。少くも大場さよ子を疑つてゐる人はあるのだ。」

「相良警部だらう。」

「さうだ。彼は、十日の日の大場の行動を可なりつつこんで調べてゐるからね。」

「假りに大場が眞犯人だとすれば、井上の遺書を見て默つてゐるだらうか。」

「それは有り得ざる場合だね。彼女がほんたうに井上を愛してゐるとすればだ。――戀する女は、戀人が眞に犯罪を行つても、なほ且つ身をもつて之をかばふものだ、況んやその戀人が無實の罪に苦しんでゐるとすれば、どんな事があつたつて默つてはゐないよ。そこが女性のいゝ所でもあり、又恐ろしい所でもあるのだが……。」

「さうだ。『犯人は井上さんではありません。この私でございます。井上さんを許して上げて下さい。そして私を捕まへて下さいまし。』とかう來なくちや嘘だよ。」

「今日は相良がきつとあの遺書を大場の所にもつて行くが、彼女に讀んで見せるだらうから、

もうそろ〳〵何とか事件が進展しさうなものだが……。」
「帶廣君、大場さよ子の方はまづ相良君に任せておいて、一言參考の爲に申しておくことがある。」
「何だい。井上の事かい。」
「さうだ。――僕は辯護士ではない、私立探偵た、まあどちらかと云へば君らと同じやうな方向で、犯人に對してゐるわけだ。さつきから井上の爲に辯じてゐるのは決して、彼のためにむやみと辯護の勞をとつてゐるわけぢやない。そりや根柢には、彼を眞犯人と信じられぬ氣持がある。從つて無實の罪で惱んでゐる彼を救ふために彼の爲に、反證をあげようと努めてゐる事は事實だが、之は被疑者防禦といふよりは、眞犯人を捕まへるためなんだよ。つまり、當局者が眞犯人でない者にこだはつてゐるうちに、當の犯人がずらかつてしまふ事を恐れるから、僕は今、非常に頭を惱ませてゐるんだ。」
かういひながら彼は、煙草入から一本のシガレットを取出して火をつけた。風邪氣で寢てゐた彼は、今日は今まで好きな煙草を一本も吸つてゐないのに、今急にシガレットに手が伸びた

のは、何かゞ彼を元氣にしたためであらう。
「それで？」
帶廣檢事が聞いた。
「それでね。こりや事件がどう進展しても、君に云はないではすまぬと思つてゐる事だが、井上道夫だね、あの男は、百合子夫人の死體のやうすを知つてゐるんだよ。」
「何？」
「僕が、――さう、たしかをとゝひだつた、自分のオフイスで博士邸の事件について彼に語つたのだ。その時、『死體に一寸妙な事がある』と云つたものだ。いゝかね、かう聞かれたら、何も知らん人間ならば『妙とはどう變なのか』とか、其他具體的な質問をするにせよ、何とか死體のありさまについて、常識的な質問をするわけだらう。」
「うん。」
「ところが、彼は、かういふといきなり、『へえ！　ぢや、ずつと早くにでも殺されたんでせうか？』とピンと來たんだ。どうだい、殺された時間にいきなり疑問をもつといふ事はかういふ

ことに素人の人間には一寸出來ない藝當ぢやないか。――昨日栖尾警部がオフィスへ來て、盛に雄辯を振つてゐる間にも、僕はこの事に想到して、實はいやな氣持になつたのだ。――少くも井上は死人の狀況を十一日の朝もう知つてゐた。この事は何を意味するか。彼が十日に死人が生きてゐるうちに行つて死ぬまで居たか、――卽ち彼が殺したか、若くは、既に殺されたあとへ彼が飛びこんだか、この何れかである。僕は第一の疑問に對する反證が今までなかつたので、實は閉口してゐたのだ。ところが、今君の一言で彼が殺したのではなく、事件後、彼が博士邸に行つた事が明かになつたよ。」

「どうして？」

「だつて彼は午後六時過ぎまで家に居たのだらう。」

「さうだ。これは彼の兩親ばかりでなく、例の緣談で來合せた親戚のものも、又近所のものも證明してゐる。」

「一方死體は死後少くも八時間といふ狀態で、午後八時半過ぎに發見されてゐる。さうすると彼が犯人でない事はたしかだ、之は君の言葉だけで十分判る。たゞ僕が云ひ度かつたのは、井

上が午後七時頃に、どうも博士邸に行つたらしい事だ。而も死人の死體をはつきり見てゐるといふ事だ。栖尾警部とこの點は一致する。――ねえ、僕の名譽にかけて僕が保護する。彼を釋放してくれ給へ。眞犯人を探さして見るから。――何彼は自白はすぐひるがへすよ。戀する男といふものは、さういつまでも、センチメンタリズムで犯罪の犧牲になつてるものぢやない、論理で攻められゝばわけなく落ちるものだよ。」

「ふん、その點は同感だ。」

「一體僕には――遠慮なく云へば當局の方針が判らないよ。死體の硬直を認めながら、午後七時半頃に博士邸に行つた井上を捕へるなんていふのは……。」

「それやさつき云つたさ、あれは保護を加へてゐるのだよ。」

この時女中が急いで部屋にはいつて來た。

「あの、帶廣樣に御電話でございます。相良警部と云ふ方から。」

「そら來た、何か新しい事が始まつたんだぜ。」

帶廣檢事は暫らく電話に掛かつてゐたが、やがてにこ〳〵して戻つて來た。

「思つた通り、大場さよが相良警部に面會を求めて來たさうだ。」
「ふん、犯人は自分だ、といふんだらう。」
「所がさうでない、犯人は他にある、とかういふのださうだ、眞劍なんだぜ。」
「へえ——自分だといはずに、人のせゐにするとは、案外圖々しい女だねえ。」
「ところが有力な證據をもつて來てるんだ。例の茶色の襟卷、——あれを持參してゐるさうだよ。僕は之から行くが、君は……。」
「何、風邪なんか大したことあない、一緒に行かう、——オイ、タクシーを一臺云つてくれ！」

一四

外は一面の銀世界だつた。
人通りの少い道を、藤枝眞太郎と帶廣檢事を乘せた自動車が、可なり早いスピードで走つて行つた。
「茶色の襟卷を持つて來た、とは一寸面白いね。藤枝君。」

「うん、全體今までどこに隱くしてゐたんだらう。浦部子爵家の自分の部屋にでも置いてあつたのかしら。」
「然しそれを今まで隱してゐたのはどういふわけかな。第一、彼女がどうしてそれを手に入れたかゞ問題だよ。」
「僕は今はつきり思ひ出したが、警視廳で相良君が黑澤を調べた時に、大場さよ子も調べてゐた。その時、茶色の襟卷といふ一言を云つたら、さよ子はぎよつとしたからね。——面白いぞ、こりやことによると、あの時僕が思ひついたやうな事實が行はれたのかも知れん。」
「ともかくかうなつた以上、いよ〳〵博士をとつちめなきやいけないよ。誰の爲に彼が默してゐるか——彼自身の爲か、さうでないか、さうでないとすれば誰の爲か——。」
こんなことを云つてるうちに、自動車は早くも宮城の前にさしかゝつた。最前から藤枝は煙草を立てつゞけに吸つて煙を車の中に漂はせてゐる。
この煙には帶廣檢事も聊か閉口したやうに見えた。
「風邪だつていふのに、そんなに煙草を吸つても、君いゝのかい。」

「あゝ平氣さ。煙草は僕の健康のバロメーターなんだ。吸へる時はもう身體の工合がいゝのだよ。」

どうして藤枝が急に元氣になつたのだらう。

井上道夫の嫌疑がうすらぎつゝあるからだと帶廣檢事は考へた。流石の檢事も、藤枝がほんたうに元氣になつたわけは察せられなかつたものと見える。

軈て車はめざす本廳の玄關に横付けにされた。

勝手をよく知つてゐる二人は、遠慮なくどん〳〵と相良警部の部屋をたづねた。

丁度警部は部屋に居らず、調室にゐるといふので、二人は給仕に案内されて調室へと急いだのである。

ドアを開けると、そこには、相良警部が、一人の美しい女と對坐してゐた。無論大場さよ子である。

「おや、馬鹿にいゝ香がするぞ。サイクラーメンだな、昨日こゝでこの女を見た時もこの香がしたが、よほどこの香水が好きなんだな。」

藤枝はかう思つて、警部に一輯した。

「檢事殿ですか。藤枝さんも御一緒ですね。今、一通り調べた處ですが……まあおかけ下さいもう一度云つて貰ひますから。」

藤枝はこの時、ぢつと大場さよ子を見た。

不意の闖入者で、一時はつとしたらしかつたが、直ぐに落付きをとりもどしたと見えさよ子は机の一角を見詰めたまゝ、又下を向いてしまつた。その樣子は、美しいとか惱ましいとかいふよりはむしろ凛然としてゐる。と形容した方が當つてゐるやうである。

數年間の檢事生活によつて、藤枝は、かうした凛然とした女性に對する時は、如何なる用意周到さを以て訊問がなさるべきであるかを知つてゐた。かういふ態度で、檢事なり警察官の前に坐つてゐる女性は、はじめからしまひまで、一つの間違ひもなく事實を物語るか、でなければそれと正反對に、徹頭徹尾、嘘をつき通すものである。

「では、よかつたらもう一度話を聞かせてもらひませうか——順序を立てゝね。」

「先づはじめに、あなたの自分で經驗した事、それを述べて、それからあなたがかうだらうと

思ふ所を云つてごらんなさい。」

至つて物馴れた調子で、帶廣檢事が、さよ子に云つた。

別段恐れたやうすもなく、大場さよ子は話をはじめた。彼女がはじめて簑川博士邸に家政婦として行つた時の話、はじめて井上道夫にあつた話、井上道夫と仲がだん〳〵よくなつた話、之らを極めて要領よく述べ立てた。

井上との間の話などは、さすがに、一寸云ひにくさうではあつたが、でも覺悟をして來たゞけあつて、井上道夫自身などより餘程はつきり、惡びれもせず物語つたのであつた。しかし、博士夫人にその事が知れて、しまひに、邸を追ひ拂はれた時の話になると、可なり亢奮した調子でしやべり出した。

「私あんな恐ろしい顏ははじめて見ましたわ。これまでだつて、奥樣が度々ヒステリーをお起しになる所は存じて居りましたのですが、あの日、はつきり井上さんの事を聞かれて、どういふのですか、のぼせ上つておしまひになつたのでせうね。

『どんな事があつたつて、お前と井上を一緒にはしないよ。もし一緒になるなら、井上もお前

も死ぬ覺悟でさうおなり』

なんてしまひにはおつしやるんですもの。

而もそれが、旦那樣がお宅の時なんですから、旦那樣もお困りになつて、無理に奥樣を部屋におつれになつたやうでした。私、ほんたうに、あの奥樣に、殺されるかと思ひましたんですよ。出て行けとおつしやられなくたつて、とても〳〵ゐられるものではございません。いえ、旦那樣は少しもお怒りにならないのです。はつきり井上、井上といふ名を奥樣がおつしやつてゐられても、困つた顏をなさいますばかりで、御怒りになるやうすは少しでもありませんでした。さう申しては何ですけれども、旦那樣が少々おとなしすぎるのです。全く奥樣はかみつくやうな調子で私におつしやいました。目つきを今でも忘れませんが、あれこそほんとの人殺の目つき……」

こゝまで夢中でしやべりつゞけて來たがさすがに、この言葉が穩かでないと考へたか、さよ子は一寸默つた。

「いえ、女の人が何かのわけで人を殺す時にはあんな目つきになるのぢやないか。とさへ私ほ

んとに考へました。私だつていゝ氣持ちはいたしませんので、旦那様がいろ〳〵取なして下さるのを失禮してとう〳〵御邸をおいとまいたしましたのです。」

「そこで三月十日の日にあなたがこの襟卷を手に入れるまでの話は？」

帶廣檢事はかういひながら、机の上に置いてあつた茶色の襟卷をかるくたゝいた。

「只今も警部さんに申上げましたのですが、私この話はどなたにも致さぬつもりで居りましたのです。ところが、井上さんが自殺をなさる。幸ひ助かつたと思へば今度は犯人として捕まつてしまはれたので、もはや堪りませんからすつかりほんたうの話を申上げてしまふ決心を致しましたのです。

井上さんからも申上げた事と存じますが、丁度あの日、母も兄も親戚の者と相談して井上さんとの事を許してくれましたのです。あの日は午前中だけ浦部様のところからおひまを頂きました。さうして喜んで、すぐに井上さんにその事を申しましたのです。井上さんは喜んでくれましたが、御承知の通り、どちらかと申すとあの方は、おとなしい方ですから、奥さんにはつきり云へるかどうか判りません。それにお恥かしい事ですけれど、私だつて井上さんが何を云

つて居やうと、あの奥様のやうすから見て、多少あの二人の間が變だとは思つて居りました。ですからいくらかの疑ひと嫉妬も手傳つて、井上さんに又電話をかけ、『今日のうちに奥さんにほんたうの事を云つてしまつて下さい。さうしてあなたも以後、奥さんと絶交するやうにして下さい』と申しますと『では今日これから行く』と申します。丁度それが十日の夕方でした。私はその頃は浦部様の所に居りまして、御邸から電話をかけたのです。

ところで、どうも安心が出來ませんので、『あなたがはつきり云へないなら私も行きます』と申しますと井上さんは『それには及ばない、僕一人で行く。いづれ後で結果はしらせる』とかう申して電話を切つてしまひました。

それで私も一時安心致しまして、浦部様の御邸に働いて居りましたのですが、だん〳〵と心配になつて參りました。丁度七時すぎだと思ひます。御邸でラヂオが聞こえはじめました。その時私ははつと致しましたのでした。

あの日、午後、奥の方々が御讀みすてになりました新聞をそろへて居りました時、何氣なくふと見ますと、簑川の旦那様のお寫眞が出て居りました。見ると、今夜放送をなさるといふ事

が出て居りました。私がラヂオがなり出した時、すぐ思ひ浮べたのはこの事だつたのでございます。

今夜は簑川博士は放送局に行つてらつしやる。して見ると留守は奥様一人だ。そこへ井上さんが一人で行つたら、どうなるだらう。いえ、嫉妬からばかり心配したわけではありません。折角大切な用件で行つてもあの方の事ですから、又何とか奥さんに説き伏せられてしまはぬものでもない。――それに二人だけの所に行つて見れば、二人のやうすもはつきりする。かう考へますともう一刻も居ても立つても居られません。

それで夕方の御食事もいたゞきもせず、その時間に、と思ひまして御風呂に行くと申して、飛び出しました。タクシーをつかまへて、簑川博士の御邸から半町ほど手前でおり、そこからそつと参つたのでございました。」

「一寸、何時頃か大體憶えてゐますか。判らないでせうか。」

帶廣検事が口を入れた。

「さあ、はつきり憶えませんのですけれど。」

「さつきね、あなたはラヂオをきいたと云つてゐましたね、そのラヂオは何ですか、博士の講演でしたか。」

「はい、何分廣い御邸なので、遠くで聞きましたので、よくは憶えませんが――私が新聞の事を思ひ出したのはたゞラヂオがなりはじめたからで、別段博士の御聲を聞いたからではございませんでしたが――さう〳〵思ひ出しました、私がいろ〳〵考へてとう〳〵決心して御風呂に行くと云つて御邸を出ました時はたしかに、博士の御聲がして居りました。それに博士邸の手前半町ほど來て、車から下りました時、そばの御菓子屋さんで、ラヂオをやつてゐましたが、たしかにそれは博士の御聲でした。」

「ふん、して見ると、あなたが博士邸近くまで行つた時は、午後七時二十五分以後だつたといふ事になる。」

大場は不思議さうに帶廣検事を見た。

「いや、よろしいのです。お續けなさい。」

「そこで御邸に参りましたが、私は暫く外に立つて居りました。わるい事ですけれども、外か

ら様子を聞いてゐたのです。すると奥様の御部屋からラヂオが聞こえて居りまして、電氣がついてゐるのです。」

「ラヂオ？」と帶廣檢事。

「はい、たしかにラヂオで丁度簑川の旦那様の御講演でございます。しかし人の聲はまるで聞えません。まことに御恥かしいわけですが私はラヂオの響きを妙に惡くとつてしまつたのでございます。つまり二人が話をしてゐるのだけれど、誰にも聞えぬやうに物語つてゐる。而も、ラヂオの音で話聲をけしてゐるのだ。とかう思ひこんでしまつたのでございます。それで我慢が出來ず裏口にまはりまして、卑怯なことですが、勝手を知つて居りますので、臺所から上つて參りました。御承知の通り、裏口から奥様の御部屋まで行くには、旦那様の御部屋を通らねばなりません。その前まで參りますと電氣がついてゐて、戸が半分程開いて居ります。何氣なくのぞきますと、そこに誰が人が仆れて居ります。驚いて戸を開けて中に入つて見ますと、机の方に足を向けて奥様が仆れておいでになるではありませんか。慌てゝ驅けよつて見ますと、もう解けて緩んでは居りましたが、そこに置いてあります茶色の襟卷が奥様の首に卷きつけて

あり奥様は之をとらうともがいたか、兩手を上にあげて握つたまゝ、苦しさうな顏をして死んでゐられるのです。私はとつさの間に、人殺しだ。誰かに殺されたんだ！　と思ひました。手足がぶる〳〵顫へます。慌てゝ、聲をあげて誰かを一度呼んだやうに思ひますが誰も參りません。しかし直ぐに、之はうつかり人は呼べぬと思ひました。誰も見てゐないのですもの、私が殺したと思はれたらどうしませう。實際、私は、もし奥様とまともに會ふやうな事があれば相當爭はねばならず、井上さんの爲なら、餘りひどいことを云はれゝば、ほんとに奥さんを殺しかねない位な決心ではひつて行つたのですからなほ更自分は危いわけです。これは默つて逃げ出した方が安全だ。と思ひ慌てゝ入口まで參りました時、ふと、一體誰がこんなひどい事をしたのかしら、と考へました。さう考へると、私は急に家中がくる〳〵と目の前でまはり出したやうに感じました。さうだ井上さんが今まで來てゐた筈だ、奥さんと今まで話してゐたのはあの人以外にはない――ではやつぱり――かう思つた時私はそこに仆れさうになりました。いえ、ほんたうに仆れたかも知れません。氣がついた時は、私は夢中で、首に卷きつけてあつた襟卷をにぎりしめて居りました。これは殘して置いてはいけない。井上さんの爲にならない、どう

しても隠さねば。かう思つてそれを懐に入れ、夢中で臺所から下駄をつゝかけて外に出たのでした。私はそれからすぐにも焼きすてゝしまはうか、と考へまして機會を見て居りましたのですが機會がなく一昨日も昨日もこれを自分の荷物の中に入れて置きましたのです。」

「で、今になつてそれを持ち出して來た理由は？」

「はい、いろ〳〵自分も考へてゐたのでございますが、今日、警部さんから見せて頂いた井上さんの遺書によりますと、井上さんは自分でも殺したと云つて居りますから今更これを隠しても仕方なく、又大切な證據を隠すのは、法律上罪になるといふ事も聞きましたので、上つたわけでございます。たゞ私はこの襟卷が井上さんのかどうかは存じませんのです。この襟卷の持主がたしかにあの人殺しの犯人にちがひない、と存じます。」

大場さよ子はかう云つて、ぢつと帶廣檢事を見つめた。その目の中には何か自分の言葉が相手に與へた影響をさぐつてゐる樣子がはつきりと判つた。

「では、君は、この襟卷の持ち主を知らないんだね。」

「はい。」

「さうするとかういふ事になるね。もしこの襟卷が井上の物だとすると、君は今日彼の爲に非常に不利益なものを持込んだといふわけになるね。」

「はい、井上さんが自白してゐる今、致し方がない事と存じます。」

さよ子はきつぱりと答へた。

なほいろ〳〵と枝葉に渡つて、檢事と警部から質問がくり返されたが、時間もおそし大體の要領も得たといふので一先づ大場さよ子は歸される事となり、輕く一禮して彼女は室から出て行つた。

あとには帶廣檢事、相良警部及び藤枝眞太郎が殘された。

給仕が新しくいれかへて行つた茶に口を濕しながら、まづ檢事が口を切つた。

「藤枝君、君の女性心理の研究も怪しいもんだぜ。お聞きの通りだ。大場さよ子は場合によれば戀人にひどく不利になる證據を持ち込んで來たよ。」

「ぢや君は今あの女の云つた事を信用してゐるのか。……馬鹿云つちやいけない。あの女はこの襟卷が井上のでない事を知つてるからこそ持ち出して來たんぢやないか。つまり、暗に犯人は黒澤玄吉だと主張してゐる事になるんだ。」

「だつて……。」

「だつても何もないさ。當今は電話といふ重寶なものがあるからね。昨日の夜にでも井上の處へ電話をかけて聞く事は出來たはづだ。無論、邸からかけるのだから委しい事は聞けない。しかし茶色の襟卷を平生してゐたかどうか位の事を聞くのは何でもないわけだ。あの女は昨日の晝まではあの襟卷を井上のものと信じてゐたらしい。僕がこゝで一寸それにふれた時、ひどく驚いた表情をした。つまり井上の爲に、折角隱してやつたものを僕がちやんと知つてゐたからさ。そこで慌てゝ昨夜井上と電話で話したのだ。そして井上のものでないと知ると、あいつ利口な女だよ、こゝでの周圍の事情からすぐ『あゝこれは黒澤のものだつたのだな。やつぱりでは黒澤だつたのだ』と考へたんだよ。ねえ相良さん、僕は茶色の襟卷の事を聞く前にたしか黒澤の事を聞きましたね。」

「さう、さうでした。」

「そこへもつて來て一方井上の遺書が出て自白してる。さよ子たるもの太いに慌てざるを得ないわけさ。見給へ、今に犯人は黒澤だ、と積極的に云ひ出すぜ。」

「ふん、……さうかも知れん。」

帶廣檢事は敢て爭はずに何か考へてゐたがやがて又しやべり出した。

「君はさつき、夫人の部屋でラヂオがなつてゐた、といふ供述を聞いたらう。」

「うん、聞いた。」

「あれは無論ほんとだらうと思ふ。あんな事をさよ子が嘘をいふ必要はないのだから。つまり夫人がラヂオを聞いてゐた、といふ事になるね。」

「そこだよ、面白いのは。」

「いひかへれば、他人から見るとあの時分まで夫人が生きてゐた、と思はれるやうになつてゐる。うん、して見ると奴、中々のくはせ者だぜ。」

「誰が！」

「犯人がさ。」
検事の眼が妙に光つた。
「ぢや何かい、君には犯人の目星がついてるのかい。」
「さあ、まるでつかん事もないよ。今まで、いろ〳〵に考へてゐた事が、大分判つて來た。問題をかう置いて見よう。夫人が午後一時に死んだか、午後七時半に死んだか、先づこの點だが、だがこれによつて、大變得をする人と損をする人とがあるのだ。午後七時半に死んだとすれば誰が得をするかね。」
藤枝も警部も默つてゐる。
「午後一時に殺された。といふ事が決定されゝば、井上道夫と大場さよ子は全然無罪だ。何故ならば、彼等には立派なアリバイが立つてゐる。之に反して博士は家に居たし、黒澤は三越に買物に行つてたといふのだが會つた人はなく完全なアリバイは立たないのだ。
ところが午後七時半に殺された、となると利益があるのは博士一人だ。彼は立派に放送局にゐた。外の三人は何れも偶然に博士邸に行つてゐる。更に、午後七時半に夫人が死ぬ事によつて、

博士は巨萬の富をかち得るのだ。少くも博士はさう信じてゐたのだ。我々がなまじ法律家だから、今までこの點がはつきりピンとしなかつたのだよ。我々は我國の相續法が如何にガツチリ組立てられてゐるかをよく知つてゐる。例之、大阪の母が死んだからつて直ぐ、その財産が博士の夫人とその妹に行くとは簡單に考へない。家督相續が起るのか遺産相續が起るのか第一考へなくてはならんからね。しかしそれは我々法律專門家のいふ事で又法律家の考へ方なのだ。
藤枝君、君は今民間にゐるからよく知つてるだらうけれども、僕ら法律家が素人にきかれる法律問題は、大抵刑法か親族相續に關する法律だ。これは如何に一般にこの法律の知識が行き渡つてゐないかといふ事を證明する。……こゝに法律を少しも知らぬ學者があつた。彼の妻の母は四十萬の財産家だ。その母が死ねば少くもその金は妻とその妹が半分でわけると信ずる。又は彼が法律家に聞いたとしやう。御承知の通り相續法の事件は詳しい事を聞かなければ聞かれた法律家はさうでも簡單に答へるより外、あるまい。又妻を殺して得をしようとする人間が、さう詳しく法律家に問題を聞くわけはないからね。こそで彼は次に一旦、妻に歸屬した財産は妻が死ねばまた自分に來ると考へる。まして自分には子はないのだからさう思ふ。ところが妻が母